第三百三十二號　明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正十一年九月一日發行（毎月一回一日發行）

法華三聖……本多日生
日本文化と外國關係（承前）……文學博士　姉崎正治
實學（續）……山根日東
淨土教と厭世思想（續）……森川日修
唯主義より見たる無量壽經……井村日咸
やんとこども……吉田昂生
事報道……
法華經要文講義（續）……本多日生
那先比丘經通解（續）……本多日生

第廿六年十月號

るけ於に内境寺海妙山本總都京
京光の眞高勇活侯宣參夏

法華三聖

本多日生

一　統

次に傳敎大師が出られて、奈良の六宗を綜合統一したのてある。南都の佛敎が六ッに分裂して居たのを、法華經に依つて統合したのてある。法華經が開顯統一の明敎てあることは論の無い所てありますから、南都各宗の有名な學者百十四人が、二十三歲の最澄の爲に降服をしてしまふたのてある。皆降服狀を捧げて、今まて一宗の學者として威張つて居つた者が皆法華經に降服したのてある。それは法華經が偉大なる爲めてある。傳敎大師の言葉を以て云へば、法華經が貴といと云ふことは決して、自ら褒めて他を譏る所の卑しい感情から云ふのてはない。法の道理爾らしむるのみて、法華經が第一なるが故に第一と云ふのて、星の光より日は明かなりと云ふが如きものてある。何も日輪に味方するが故に星の光より日は明かなりと云ふのてない。「深きこと蒼海の如く、明かなること日輪の如く、高きこと須彌の如く、圓かなること

と盈月の如し」、法華經は其圓さを語れば十五夜の滿月のやうなものであり、高さを語れば須彌山の如く、明るさを語れば日輪の如く、深さを以て云へば海の如くであると主張せられた。實に私は痛快ぢやと思ふ。さうしてその法華經の理想は直ぐに日本の文化を綜合統一する方へ向いて行くから、傳教大師に依りて王法佛法の融合は唱へられた。無論宗教と政治を混同するのはいけないが、又政治と宗教が反目して勝手々々の方向を辿ることも間違つて居る。

それ故に宗教家の方も、たゞ世間から懸離れた意味の宗教ではいかぬ、傳教大師は在家菩薩の主義を盛んに主張せられた。その代り政治家も佛教を奉じて菩薩の行を忘れてはならぬ　傳教大師の時に、桓武天皇の勅命に依つて叡山に鐘を鑄て、在家菩薩主義が日本佛教の大主張なりと書かれて居る。又儒教の事に就ても、比叡山の學問の中には無論儒教の研究は盛んであつた。又神道の事に就ても傳教大師は一實神道を開創せられた。斯くて傳教大師は綜合的な方針であり、日本文化の上に開發と統一を與へることに努力せられたのである。

日蓮聖人はどうかと云ふと、先に井上先生が言はれたやうに、矢張り統一の爲に働かれたのである。一方から見れば他の宗旨を排斥したと思ふ人もあるが、分裂を攻撃したのであつて、佛教の統一のみに止まらず、日本文化の統一に努力せられたのである。故に惟神道の精髄を奉じ國體の上から當時北條の政治を攻撃して大義名分を宣明し、又儒教では義の觀念が最も大切であるが故に、この義の實行が日蓮聖人に依つて見られたのである。松蔭先生の言はれた通り、たゞ仁義の文字を講釋するのでなく、生を含

て義を取るのが眞の儒者である。これから見ると鎌倉時代に儒教の眞精神を實行したのが日蓮聖人である。又佛教の事に就ても能くその教を正して信仰を大切にすると共に、信仰から出た道德の實行を重じた。それが國を思ふ所の精神に現はれ、又親を思ふ精神に現はれた。總て佛教の實行である。出來損ひの坊主であつたら、親が死て居るか生きて居るか考へない。國家の興亡も意に介せぬのであるが、日蓮聖人はこの弊風を去つて、立正安國の精神を發揮し、法は體なり國は影なりと云ひ、教と國とを結合せられた。今日は日蓮聖人の愛國の精神が能く分つて來た。どうしても内には大義名分を明かにし、人心を刷新して綱紀を張つて行かなければならぬ。外には國を榮えさせるに就ては、何處までも愛國の精神を發揚して行かなければならぬ。日蓮聖人は「豈吾國を思はざらんや、法を知り國を思ふの志」と言ひ、又「泰山に登らざれば天の高きを知らず、深谷に入らざれば地の深きを知らず」と云ひ、我が國民の奉ずる明教は、泰山に登つて天の高きを知るが如くに、眞實のものを掴まなければならぬと主張した。人類の文化を根本に就て考へ、而して釋尊の御理想から窺つて見ると、今人の考へて居るやうに、政治とか、法律とか、軍事とか、經濟とか云ふことだけやつて行つたならば、必ずや文化は頽づくものであると思ふ。軍備が盛んになつて、戰爭に勝つても、其國はそこに一つの惡弊を生じ、敗ければ敗けて又惡弊を生ずる、敗けても勝つてもいかぬ。經濟も其の通りて、教化を除外しては旨く行かない、成效すれば成金風を吹かして贅澤をする、失敗すれば人を羨み世を呪ふ、孰れにしてもいかない。政治も矢張り其通

り、道德と宗教とを無視したならば、結局法律を寛めれば寛めるていかず、取締を嚴重にしてもいかぬ、そこて世の中はどうしても教化を第一義としての文化てなければならぬ、その教化の補助機關として政治經濟などは働くに過きぬ。さう云ふ風に文化を建設するのが轉輪聖王の治め方だと釋尊が說かれて居る。それ故に俺は伽毗羅城の王とはならなかつたけれども、教化の方から法界の王と成ると言はれた。果せる哉、印度に王樣は澤山出たけれども、その名前すら傳はらぬが、釋迦牟尼の御名とその教化は三千年後に及んて居る、尙ほ今後も全人類の間に釋迦牟尼の德化は偉大な影響を與ふるてあらう。釋尊滅後三千年を經て居るけれども、釋尊が餘り偉かつたからして、三千年經てもまだ近付き得ない程その教化が深遠廣大てある。人類が今すこし賢くならぬと云ふと釋尊の教に接近することは出來ない。般若經ても、楞伽經ても、華嚴經ても、どのお經を見ても一寸自分の智慧の方が覺束なく感ずる。斯樣な偉大な教を我々に與へて下さつたことは實に有難い。伽毗羅衞の釋迦族の人達が釋尊成道の後に迎ひに行つて、「あなたはさう云ふ說教などせず伽毗羅衞に歸つて王樣になつて、大いに驥足を伸ばして貰ひたい」と願つたが、お釋迦樣はどうお答になつたか、「それはお前何も俺は王樣を廢めて居りはせぬのだ。今當に是れ王の身なり、名けて法王と言ふ」と、全人類の精神を支配する所の法王となつて居るのてあると言はれた。その法王と云ふことも只教を垂れると云ふ事てはない、法行王と云うて是は政治の本體てある。文化の本體てある。轉輪聖王が或場合はこの法行王てあり、日本に於ては聖德太子がそれを理想とされた　天皇の御位にはお即きにならぬけれども、攝政の名の下に日本文化の基を開かれたのてあり、其他聖德太子の爲さつたことは、所謂政治や文化を發育なさつたのて、佛教の眞精神を發揚せられた次第てあり、釋迦の佛教を開いたのも其通りて　政府とか、國家とか、文明とかの外に於て隅つこの方へ小さい宗派を立てたのてはない、人類文化の基礎と方針と實現の方法とに就て之を明かにし、それを導いて行くのが佛教てある。

誠にさう云ふ意味に於て聖德太子はお釋迦樣に能く似て居ると思ふのてある。お釋迦樣は伽毗羅衞の悉多太子からして佛にお成りになつた、聖德太子は矢張り厩戸の皇子てあつて、さうして日本文化の魁をなさつて居るのてある。どうもそのお考が同じやうに思はれるのてあります。その理想を承繼いて考へて參りましたならば、法華經を發揚することは、小さな宗旨宗門を擴張して居る運動てはなくして、理想の文化を開發する上に努力する事業てある。私はこの意味に於て我國の聖德太子、傳教太師、日蓮聖人の三聖は、何れも法華經を中心にして理想的の文化を開き、統一ある文化を開き、さうしてそこに人格を向上する教化の根本をお示し下さつたことを認め、國家の爲め、人類の爲め深く感謝する次第てあります。（完）

日本文化と外國關係

文學博士　姉崎正治

もう一つは日蓮聖人時代の文明である、特にこの場合は大陸文明の動いて來たと共に、この場合の動き方は前の聖德太子の時代の文化の運動と違つて支那大陸の文明それ自身が蒙古勢といふ兵力の爲めに危ふくなつて居つた時代である、謂はゞ世界の文化が文化と兵力との境目に立つた時代である、その餘波がこの國にも及ばんとした時であります、この問題に就ても色々の考ふべき點があると思ひますが、それを今一々私の考を申上げる必要もなく、又餘醸もないのであります、兎に角この動搖の際に際して人々の執つた態度を比べて見ると、色々の對象が出來る、先づ一般の人は何をしたかといふと、蒙古が來るさうだ、何だか恐ろしい、既に來られてから驚いた者もありますが、先づ多くの人のやつたのは、上は朝廷から下庶民に至るまで多くの人のやつたのは御祈禱であります、そこらの神社お寺に行つて、藥師ごされ八幡ごされ、何でも彼でも有る限りのものに御祈禱をしたのであります、それで風が起つて敵の兵船を轉覆した、その御利益に依つてこれを撃退したのである、弘安四年元の船があれだけ轉覆つて、もうあれから來なかつたと我々は思うて居るけれども、歴史の結果で見ると來なかつたやうであります、元は決してその計畫を棄てゝは居ない、その爲めに一將を立てゝ尙ほやつて來る計畫をして居る、こちらでは皆恐れて居る、それでまた御祈禱は止めずに居つたのである、御祈禱をやる、坊主神主は暴れ出す、俺等がなければこの國は危ないぞ、さうして社や寺を無暗に立派にする、この時代のさういふ種類の情報から見ますと、坊さんや神主は最も威張つた時代である、それで餘り金を使ひ過ぎて北條氏は閉口垂れてしまつた、富强で國を亡ぼす國もあります、獨逸の如きはそれであります、富强を恃みにして國を亡ぼしたものは獨逸が我々の眼前にあります、北條氏或は北條氏時代の日本は一種特別な國法を執つた、坊主神主を屈つて國費でやらうとして、それで財政上倒れたのである、單り財政の問題だけではなかつたので、緊張の問題もある、その緊張は何處に現はれて居るか、文永十一年の時もさうでありますが、弘安四年の時は中央政府は殆ど十分の劃策をして居ない、弘安四年の時にも敵が來て既に博多灣に碇泊をして、やつと二三ヶ月經つた後に總大將を京都から出さして、その人が出陣して、一說には九州迄とありますが、一說には長門の長府迄とありますこの方が眞實かも知れぬ、兎に角途中まで行つた時に敵の船が轉覆したといふ報知を得て歸つて來た、さうして國防は何處に委せて置いたかといふと、あの九州の北の海岸にズットと石垣を築いたのであります、これにはモウあらゆる人間が出掛けた、坊主も神主も皆お手傳をした、敵が來ると石垣にもぐり込んで、さうして時々出て防いで蒙古勢を上陸させなかつたのはお手柄である、併し敵はズン〳〵移動して來るものだから、その結果西の方の日本は非常に疲弊した、さうして東の方は割合にさうした苦痛を知らずに濟んだ、國がこの點に於て非常な不平均を起した、斯くの如くして二度三度戰爭といへば常に關西に集中して、租稅や其他の重さは全體同じでありますが、殊に土工の關係其他はその國の負擔になるといふことで、實に不公平な狀態

てあつた、當時の國防策は是てあつたのてある、さういふ國防策てやらうとした。

そこて私は日蓮聖人の建言されたのをそのまゝ用ふれば元の兵が來なくて濟んだとは思はない、如何に日蓮聖人を信じてもさう考へることが出來ない、諸君は或はさうお考へになるかも知れませぬが……何となればアノ時日蓮聖人が幕府へ建言されたのは何かといへば、國中の謗法を斷じて南無妙法蓮華經と唱へよ」といふことてある、これを精神から見れば宜しいてせうか、形だけをやれば實にをかしな事になるのてあります、アノ時代にそれては北條氏がその通り御尤もだといふて、皆な頭を坊主に剃つて南無妙法蓮華經、ステヽコドン〳〵とやつたら、それて元の船が來なくなつたてありませうか、その來た船がそのお蔭て轉覆へつたてありませうか、そんな事を恃みにしてやるやうな國防策てあつたら、矢張りその他の人が無暗に其邊の社や寺て御祈禱をしたといふ國防策と同じことてある、この根本精神を一つ尋ぬる必要がある、その精神は何かといへば矢張り我國の命を守るといふことが大切てあると共に、その國の命は何ものに基いて居るか、宇宙の大道に基いて居るといふこの大信仰に基かなければ何の役にも立たぬと思ふ、日蓮は最後に、幕府も自分を用ゐない、國民も覺めない、又省みれば我身の懺悔滅罪が足りない、寧そこの場合忍從生活をしやう、或は考へて見れば元の蒙古勢が來る、本地垂跡のこの國を攻めに來られるのかも知れぬ、と云つて居る、只言つて居られるのてはない、手紙に書いたのてある、だから日蓮は日本の亡國を喜んて居る、日本を亡國にせんが爲めに蒙古勢を招いて來やうとするのてあらうとまて誤解したものがある、併しこの日蓮の信仰があつて本當の信仰と言ひ得ると思ふ。

現在の日本は外に向つて軍艦を殖やせ、俺の方はもう少し軍艦を殖して貰はなければ國防は出來なくなるといふやうな要求をして居るだけてなしに、內に於ては警官の力に依つて思想を取締らうとして居ります、けれどもサーベルに依つて揚つた所の國の威光ならば、サーベルに依つて忽ち壞されるものてある、その前例は明かに獨逸にあるのてある、その他サーベルに依つて國威を輝かしたもの〻運命は我々は今までの歷史に依つて澤山示されて居る、それてもう一つ上に立つて、我國も彼の國も一圓浮提、悉く同じ道に立つて共々に行かうてはないか、この、信仰に縋つて眞個の世界的文化の問題といふものに打ッ突かる用意が出來るのてある、併したゞ世界的といふ問題だけてない、もう一ッ退いて考へれば、丁度日蓮聖人の如く我々自ら根本の懺悔滅罪が足りないのてはないか、自分々々に現在の社會を觀察して、今の社會の人が實に善くないといふことは考へたい、それも惡くはないてありませう、又それと同じく我國の惡いことを考へると共に、他の國も善くない、私慾ばかりを考へて居るといふことを考へる、さうしてこれを匡さうとする、これも結構のこと〻思ひます、併し人を責め他の國を責めると共に、若し己れ自ら責めるといふことがなかつたならば、人を責めるのはそれは僞善てあります、己れ自らの國を匡すことを知らないて、人の國の僞りを攻擊する事だけを知つて居る者ならば、その國は矢張り僞善の國てある、僞善を以て僞善を責めても何の役にも立たない、然らば國の問題と云ひ、人の問題と云ひ、最後は我々自らの命に懸つて來る問題てある、さうして我々自らの命、我々自らの靈性の中にそこに又宇宙の大道を發見して行つたならば、我々の懺悔滅罪は即ち世界人類共々の懺悔滅罪になるといふことになる、日蓮聖人は「時を待つべきのみ」と言はれたが、それは唯將來を待つだけてはない、今日一人がその懺悔滅罪を行へば、この世界に聖德太子の言はれた菩薩の國土を實現することが出來るのてある。

外國の關係といふ問題は色々な方面があります、利害問題もある、政治の問題もある、經濟の問題もある、併し我々の立場から申しますれば根本は遂に道德問題である、道德問題は遂に我靈性の精神の問題である、各國の人民俱々皆佛性を開發して、さうして共々菩薩の道を遂げることの出來るやうにそこに進んで行く、この我も人も共に進むべき道、所謂法華一乘の道を將來に成就するといふ銘々の根本も此處に在るのではないかと思ふのであります。申上げたい事は澤山ありますが、極く項目だけで今日は失禮致します。

實學

（餘滴）

山根日東

世の中には兎角骨折らないで大儲けをしやう、勤勞をぬきにして濡手で粟の成金となりたいナーとの、細くない量見を起す者が多いが、以ての外の事である。運命は進んで自ら開くべきもので、宿世の果報より外、不精者の手に決して轉げ込む次第のものではない。刻苦勉勵と一誠貫之の持久戰を經なくては、どうして〳〵他人の羨む身分と成り得る譯はない。

縣代隨一の陸軍參謀總長と謳はれた元帥大將上原勇作氏は、聰明英達の資性を具えて、少年時代を薩島造士館に嶄然たる頭角を現はした、氏は日向都の城の出身で長岡家に生れたが故ありて上原家の養子となつた。本場所の東京で思ひ切り勉强をと思つて居たが、養家の事情でオイソレと上京研學を許されなかつたので、炎の如く燃へ立つ心を抑えて其時機の到來を待つた　運命の神は決して何日迄も情なくはしない、同鄉の先輩某氏其志を察して痛く同情し、當時陸軍部内の花形と知られた野津道貫將軍へ紹介狀を書て、負笈上京野津家の玄關番となつた。勿論學校へ通はせて呉れるなどの約束は更に結ばれ

て居ない、自ら發奮して自ら行くべき途を開拓する外はない、が何しろ主人の將軍は比類稀なる肝癪持と來て居るから、其玄關番と云ふ事からして却々勤め了せにくい、時々拳骨のお見舞を腦天へ受ける事を免れなかつた、併し元來が凡物でない元帥の事として久しからずして、主人の氣風を全然呑込み、其意に逆はないやうに機敏と誠意とを以て立ち働くやうにし、而も寸暇を偸んでは讀書に耽るのであつた、其才氣と篤學とが終に將軍の認むる所となり、即て元帥の行くべき途を照す光明となつた。

將軍が第五師團長として威風堂々たる時、其部下に工兵大隊長として赴任して來たものは誰あらう昔の玄關番上原勇作其人であつた、而も洋行歸りのホヤ〳〵て陸軍の新智識として天下の輿望を擔つて居るのを見て、道貫將軍默つて居られない樣な氣持がした、开處て部下の經理部長たる柴直言氏に自分の意中を打ち明け、「不束者ではあるが自分の娘を上原に嫁つて欲いものだナー」と媒介の勞を頼んだ、柴氏はよろしい一骨折りましやうと月下氷人となつて、夫となく妻帶しろと側面から聳慂したが、「僕は軍人無妻主義者で三十五歳の今日迄通して來たのだから」と容易に承知しなかつたのを、軍人氣質の單刀直入實は野津將軍の令嬢だがと、横說縱說やつとの事首を竪に首肯させた。

世襲の財產に安樂の生活を營んで、何等有意義の社會奉仕をもなさず、「喰ふて飲んで寢て起て又手その後は死ぬるなりけり」と來ては、それこそ祿でなしの穀つぶし、少しは反省自覺して是ては今日樣に濟まないと發奮興起しなくてはなるまい。とは云へたゞ發奮したからとて、夫が動物園の猿猴が右へ左へ上へ下へ飛び廻り刎ね廻る如き滅多矢鱈の動作のみで、秩序なく考慮なく徒らに財を散ずるのみでは、害こそあれ役には立たない、开處には智慮分別が加はゝらなくてはならぬ、頭腦が相當活動なくてはならぬ、たとへば慈善事業の寄附行爲にしてからが、よい事には相違ない樣なものゝ、其結果が依賴心を助長し一種の被救濟病者を作る事になりはすまいか、考へものである。

小僧の時に讀んだ古書に頗る振つた妙話がある。往昔或處に有名な千萬長者の子息殿、不幸にして父親には早く死別れたが、慈愛深き母の懷に人となり、親讓りの財產は有り餘るほどある、女房は同情の强いやさしみの深い所謂良妻と來て居る、世の中に何の不足もない他人の羨む果報者だが、悲い事には性質が少しと夥多と愚鈍闇才と來て居る。處て先生熟々考へた、何て乃公は斯んな不器用な馬鹿者に生れたのだらう、金錢が言はする旦那樣て、表面は出入の者始め皆の人がチヤホヤして居るが、どうも蔭では馬鹿旦那扱ひをして居るに相違ない。其癖親の慈悲て家庭教師まて雇ひ込んて教養撫育を十二分仕込んて貰つたのだが、右から左へぬけ通り何の得る處なく、頭腦は何日も空虛だ、隨て別に道樂とてはない身の年々增殖する金銀財寶の遣ひ途すら知らない、何たる魯愚な乃公てあらう。世の中は隨分廣いと聞く、何處かに智慧を賣捌く人がありそうなものだ、此處に從容として居たのてはと、急に思ひ立つて矢も鐵砲もたまらばこそ、親にも妻にも告げず、うんと云ふ程黃金を懷中にねじ込んだまゝ、旅の空へと憧憬れ出た。

「旅は牛、窓て月みる今宵かな」て、現代の如く汽

車汽船馬車自動車と交通機關の發達せる文明の世の中でも、旅行は氣樂とのみは參らず、隨分と不如意ものだ、況して雲助の舁き廻る駕籠と駄馬の外は草鞋脚袴でテクルより仕方のなかつた時代の事だから、如何に懐中に金ありとは云へ、先生隨分と苦勞を重ねて方々尋ね歩き、其宿々の誰彼に智慧を賣る人は無いかと尋ね廻つたが、そうですナー一向存じませんナーと要領を得ない事夥多しい、けれども先生そんな事に性懲する樣な單純な旅行でない、何處かにあるに相違なしと、根氣よく尋ね歩く事殆んど一年有半。

一日片田舍の寒驛に宿をとり相變らず旅館の主人に尋ねて見ると、有ますく〳〵此處から二里余の桂林寺と云ふ山寺の和尚さん、末代稀有の大德で何でも教示を請ふ人に滿足を與へぬ事なしとのこと、御許の覓むる智慧位は朝餐前の注文と存ずる程に、尋ねて願つて御覽なさいとの挨拶。盲龜の浮木優曇華の花、喜び勇んで翌朝桂林寺にたどり着き、和尚に面會して爾々と願意を演ぶると、和尚咳一咳、それは奇特の事敎へて進ぜる事雜作はない、が併し高價ぞ、老衲の敎へる智慧の珠は文字が四々の十六字だ、一字千金と相場が極つて居るよつて四々の一萬六千兩ドウダ美事購へるかなと來た、ハイそれは二萬兩でも三萬兩でも黄金に絲目は引き申さぬ程に、是非お授けをと胴卷から一萬六千兩の大金耳を揃えて布施に捧げた、さて敎授つた四句十六字は

前行七歩、後行七歩、思惟分別、智慧無量。

の一偈てある、忝なしと說明諸共其十六字を推し戴き、是さえあれば大願成就と喜び勇んで歸途に就た。足も心も勇み立つて歸程幾百里、さて懐かしき故郷に歸り着たのは深雪降り積る三冬の初夜、我家の庭口に辿り着てほつと一息すると、思ひきや家内には何かしら私語喃々、ハテナと樣子を密と覗いて見ると、圍爐裏を隔てゝ妻は此方向きに、對つて彼方向きに老耄頭巾を冠り角帶を締たる男姿如何にも怪しい。又手は乃公の留守に密夫を拵え腐つたナ、あの此處な不良腐れの女奴がと怒氣激發、イデ踏込て成敗をと焦燥ては見たが、まて暫し急ては事を仕損じる、敎はつた智慧を使用ふのは此處だぞと、徐ろに前方へ七歩後方へ七歩、數刻思惟て見た。無斷て飛出したのは乃公の方が惡いぞ、それも半月か一月位ならまだしも、僅指ふれば一年半になる、元來が馬鹿の乃公を亭主と思へばこそ我慢辛抱して呉れたのだ、夫がひよんな評子の甄單て乃公が家出する、定めし出た日を命日と亡者扱ひの回向供養をして居る事てがなあらう、又されても文句の言ひ樣は無い筈、それに歸るか歸らぬも不分明の乃公を何日迄のんべんだらりと待て居られやう、先祖傳來の家は大事だ、母者人の勸奬て後添を迎えたとて今更無理もない談道、或は又事によると女計りの家の取締に親類緣者から確實した男子を留守番に頼んて來て居ないとも限らぬ、是はウッカリ荒立た事は出來ない、兎も角樣子を見た後の事、早まる場合てないと考へ直し、又手只今歸たよと靜かに草鞋の緒を解く、ヲヤお歸り遊ばせと喜色滿面、出迎も禮儀正しく何等異狀のなきのみならず、老耄頭巾を刎ね除けた其面影は逢ふ方なき母者人、其方の留守中は男氣のない女二人の世帶、他人に馬鹿にされぬ樣小盜に見込まれぬ樣と、心にもない男裝て押通したとの親の慈悲、濟ませんかつたと平あやまり。考へて見れは智

慧の力は廣大なもの、一萬六千兩は安價々々、此調子て何事も熟慮斷行すれば、通れよく働き、よく敢ずる千萬長者の立派な且那樣になれる、況んや賢い女房の補佐もある事と、悉く喜んてころこんて天下泰平を謠つたとの事。（法苑珠林）

顯誘法鈔の一節に若人信心あつて智慧あること無き、是人は則ちよく無明を增長す、若人智慧あつて信心あること無き、是人は則ちよく邪見を增長すとの警句がある、如何にも春々服膺すべきことて、無明と邪見の二魔賓に陷らぬ樣、活きた學問を修めなくてはならぬ。

淨土教と厭世思想（續）

森川日修

法然親鸞の着眼點

本邦に於て淨土教に第一着眼した法然は、實に時機を看破したものてある。當時奈良の六宗既に光りを失ひ、平安朝の二宗即ち天台宗眞言宗は隆昌の極弊害百出し、南都北嶺の僧徒は暴徒と化し、皇室でも手に餘り切りに宮中に於て、加持祈禱ありしも何等效驗なく、歌舞管絃の洋々たるうちに、華奢風流をつくし、遊惰放逸を事としたる藤原一門も衰微し源平二氏權勢を相爭ふに至りては、朝に平氏を送り夕に源氏を迎へ、世は全く爭亂の巷となり、人心は動搖し、上下の胸裡安からず、泡沫夢幻、如露亦如電は決して文字てなく、源平盛衰記の記者ならずとも、祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を顯はし、奢れる者は久しからず、春の夜の夢の如く、猛き心も終に亡びたるは架空の言てなく、其儘、世人が眼前にみせつけられ、朝に夫を失ひ、夕に子は殺され、親緣離散し、剩へ皇帝にして海に沒し、主上も遠嶋に流さるゝ如き古今未曾有の悲劇日夜相次ぎ、何人も驚心駭

膽、現世の顧みなきを歎き、何れにか慰安を求めんとする時、天台眞言の如き、一は哲學的にして、幽玄の學理を探求するにいとまあらず、一は形式の加持祈禱にて到底人心に泌み渡り難く、此時此際、此の厭世悲觀の思想瀰漫せるを見、法然靜かに、天台眞言を難行道と蹴り、彌陀稱名の一行易行道にて何人も修するに易く、效益大なり、早く此世を去て阿彌陀の淨土に往生せよ、彼處は飛ぶ鳥も金色、流るゝ水も皆瑠璃色にして、娛樂歡樂意のまゝなりと勸めたもので、誠に旱天の驟雨であつて、我も〳〵と南無阿彌陀佛々々と厭世思想を滿足せしめた、然るに驟雨も霖雨となり、只だ雨のみが人の救濟であるとなりては一種の迷想でありて、佛種こゝに腐蝕するに至るであらふ。

後鳥羽院の建久九年關白兼實の請により、法然選擇集を著し、一切經に難行道、易行道、聖道門、淨土門、漸教、頓教ありとなし、彌陀稱名は、易行道で淨土門で、他は皆な難雜で捨てべきものと力說した撰擇集は名の示す如く、彌陀稱名の本願を撰擇した邊は、當時天台眞言の信仰を一蹴するには、效果あつたものに相違ない。

法然は餘程篤學の人で、天台眞言をはじめ、當時の教學は研究したものである、勅修御傳と稱し彼の門流の貴重としてをる法然行狀記に

上人聖道諸宗の教門にあきらかなりしかば、法相三論の碩德、面々にその義解を感じ、天台華嚴の明匠、一々にかの宏才をほむ、しかれどもなほ出離の道にわづらひて、身心やすからず、順次解脫の要路をしらんために、一切經をひらき見たまふこと五返なり、一代の教迹につきて、つら〳〵思惟したまふに、かれもかたく、これもかたし、しかるに惠心の往生要集もはら善導和尙の釋義をもて指南とせり、これにつきてひらき見給にかの釋には、觀想の凡夫、稱名の行によりて順次に淨土に生ずべきむねを判じて、凡夫の出離をたやすくすゝめられたり、藏經披覽のたびに、これをうかゞふといへども、とりわき見給ふこと三返、つゐに一心專念彌陀名號行往坐臥不問時節久近心心不捨者是名三定之業順彼佛願故の文にいたりて、末世の凡夫彌陀の名號を稱せば、かの佛の願に乘じて、たしかに往生をすべかりけりといふことはりを、おもひさだめ給ひ、これより承安五年の春生年四十三、たちどころに餘行をすてゝ、一向に念佛に歸し給ひけり。

此記は彼の徒の手になりし者ゆへ、多少誇大の邊もあらむが、大體法然の心理狀態、念佛專修を採りし動機等を知ることができる。又た曰く、

淨土宗の諸宗にこえ、念佛一行の諸行にすぐれたりといふことは、萬機を攝するかたをいふなり、理觀、菩提心、讀誦大乘、眞言、止觀等、いづれも佛法のをろかにましますにはあらず、みな生死滅度の法なれども、末代になりぬればちからをよぼすべからず、行者の不法なるによりて機がおよばぬなり

時をいへば、末法萬年ののち人壽十歲につゞまり罪をいへば、十惡五逆の罪人なり、老少男女のともがら、一念十念のたぐひにいたるまで、みなこれ攝取不捨のちかひにこもれるなり、このゆへに諸宗にこえ、諸行にすぐれたりと申なり。

然り當時天台眞言等を修する處困難にして何等益する處なきを見、世態の悲慘を考へ、死後の淨土に專

注する消極思想は、確かに其時機を知つたもので、一時の慰安を與へたてあらう、然しながら今日は罪惡を彌陀の救濟に求め、死後の極樂のみに委すべき時でない、現在に於て罪惡を未然にふせぎ、現實に此の社會を美化し、過現未一貫の信念を以て勇進すべき時である、又た今日の機根は幻想なる西方の極樂を欣求せず、生ける人間界を淨化すべき力ある宗教を求めつゝある人である、豈に死後のみの救濟を目的とする方便に滿足するものでない。

彼の來迎和讃に

攝取不捨の光明は、念ずる所を照すなり。
觀音勢至の來迎は、聲を尋ねてむかふなり。
娑婆界をば厭ふべし、厭は苦海を渡りなん。
安養界をば願ふべし、願はゞ淨土に生るべし。
厭世悲觀の調、實に申し分なしと云ふべきである

かくて彼等が厭世教にあらずといはゞ、人も欺く大虛妄といはねばならん。

親鸞は、法然より一層強く純他力淨土を主張し、說明最も巧妙に又た圓曲である。末燈抄に

往生はなにごとも〳〵凡夫のはからひならず、如來の御ちかひにまかせまいらせたればこそ、他力にては候らへ、樣々にはからひあふて候らん、おかしく候、如來の誓願を信ずる心のさだまるとまふすは、攝取不捨の利益にあづかるゆへに、不退の位にさだまると、御こゝろえ候べし、眞實信心のさだまると申も、金剛の信心のさだまるとまふすも、攝取不捨のゆへにまふすなり、さればこそ無上覺にいたるべき心のおこるとまふすなり、これを不退の位ともまふし、正定聚の位にいるともまふし、等正覺にいたるともまふすなり、このこゝろのさだまるを、十方諸佛のよろこびて、諸佛の御こゝろにひとしとほめたまふなり、このゆへにまこと　信心の人をば、諸佛とひとしと申すなり、また補處の彌勒とおなじともまふすなり、この世にて眞實信心の人をまもらせたまへばこそ、阿彌陀經には十方恒沙の諸佛護念すとはまふすことにては候へ、安樂淨土へ往生してのちに、まもりたまふとまふすことにては候はず、娑婆世界にいたるほど護念すとはまふすことなり、信心まことなる人のこゝろを、十方恒沙の如來のほめたまへば、佛とひとしとまふすことなり、また他力と申ことは、義なきを義とすと、まふすなり、義とまふすことは、行者のおの〳〵のはからふことを義とは申すなり、如來の誓願は不可思議にましますゆへに、佛と佛との御はからひなり、凡夫のはからひにあらず、補處の彌勒菩薩をはじめとして佛智の不思議をはからふべき人は候はず、しかれば、如來の誓願には、義なきを義とするは、大師聖人のおほせに候き、このこゝろのほかに、往生にいるべきこと候はずとこゝろえて、まかりすき候へば、人のおほせことにはいらぬものにてさふらふなり。

此の一文にて能く親鸞の絕待他力を主張せし思想を見ることができる。併し親鸞の說に無理がある、彼が亂雜なる天台眞言に效益なきを見て、法然の如く彌陀一佛に專注せしむる着眼は、人心を引付ける方法として或は可ならんも、佛教教理上の論議に際しては、其は凡論凡議である、我れ關せず、我は撰擇本願によると云ふ、是れ教理を顧みず、單に彌陀を信ずと云ふは女性的感情の上に立脚したもの

て、一時の感情を滿足せしむる消極的思想である、且つ親鸞は凡慮を顧ずと云ひながら、一切經を批判し、區分し、淨土三部經は、如來興世の正說、一乘究竟の極說、と論定してゐる、其の論定は何人がせしか、結局親鸞の凡見凡慮で決定したものである、しからば親鸞は已れの凡慮批判は間違ひなく、人の批判は愚論であると云ふに至つては、後は猫撫聲で人を眩惑せしむるものであると云はねばならん

又た十方の諸佛護念すといふも阿彌陀經には東西南北上下の六方と說ひてある、假りに是を十方としたところで、「安樂淨土へ往生してのちに、まもりたまふとまふすことにては候はず、娑婆世界にいたるほど護念すとはまふすことなり」とは全然虛言である阿彌陀經に娑婆世界に至るほど護念すとの意がない、元來淨土敎家の意は、死後極樂に往生すると云ふ、慰安的に說く處に純他力と云ふことができるのて、若し娑婆世界に於て彌陀が護念すと見るには、彌陀の見方をかへて、自力の彌陀にすゝめねばならん。私は淨土三部經の經意は、純他力を述べたものてなく自力と他力を巧妙に說かれたものと見る。

玆て親鸞と法然と毛色のかはりてをる處に、法然は他力說が單純てあり釋尊を全然疎外せぬ邊があるが、親鸞は自力的に見て凡て純他力に引入れる邊が法然より餘程巧妙てあるだけ、經意を去るものと云はねばならぬ、親鸞が和讃に

無明の大夜をあはれみて、法身の光輪きはもなく無碍光佛としめしてぞ、安養界に影現する、久遠實成阿彌陀佛五濁の凡愚をあはれみて、釋迦牟尼佛としめしてぞ迦耶城には應現する。

此の文によると釋尊は彌陀の應身になる、處がどこに釋尊が彌陀の應身てあると說いてある、是等は如來は法身なり、法界の身なり等の諸經の文意を巧妙に彌陀にもつてきて、更に釋尊に應用したものてあるがチイトだまされる、親鸞の文類多くかく圓曲に云まわしてあるから、彌陀を久遠の絕對身と思はせそして西方一隅の彌陀へ純他力往生と說くから隨分凡見凡慮てない。

併し當時天台眞言等の學究的新禪的の佛敎に對抗し他力往生を主張し、人心を歸向せしめたる、法然親鸞の着眼點は其時の環境を今一應考察する必要がある。親鸞敎行證文類第六に

竊に以みれば、聖道の諸敎は行證ひさしく廢れ、淨土の眞宗は證道いま盛なり、しかるに諸寺の釋門、敎に昏くして眞假の門戶を知らず、洛都の儒林、行に迷ひて邪正の道路を辨ふることなし、斯をもて興福寺の學徒、太上天皇（後鳥羽院）今上（土御門院）聖曆承元丁卯の歲、仲春上旬の候に奏達す、主上臣下、法にそむき義に違し、忿をなし怨を結ぶ、玆によりて眞宗興隆の太祖、源空法師、ならびに門徒數輩、罪科を考へず猥がはしく死罪に坐す、あるひは僧儀を改め、姓名をたまうて遠流に處す、予はその一なり、爾ばすでに僧にあらず俗にあらず、この故に禿の字をもて姓とす、空師ならびに弟子等、諸方の邊州に坐して、五年の居所をへたり、皇帝（佐渡院）聖代建曆辛の未の歲、子月中旬第七日勅免を蒙りて入洛己後空、洛陽東山の西の麓、鳥部野北の邊大谷に居したまひき、同き二年壬の申寅月下旬第五日午の時に入滅したまふ、奇瑞稀有すべからず、別傳にみえたり、しかるに愚禿釋の鸞、建仁辛の酉の曆、

雑行をすてゝ本願に歸す。

右文の如く法然親鸞其他念佛者流罪せられ、法然は藤井元彦の名にて土佐國蟄多に、親鸞は藤井善信の名にて越後國國府に流さる、時に年三十五居ること五年後ち親鸞は常野の間にあること凡そ十餘年、其後相摸に七年、流罪より二十八年にして嘉禎元年歸洛し、弘長二年十一月九十歳にて寂したものである、これより前、土御門帝の元久元年甲子十一月七日源空並に其宿老八十餘名連署にて、天台座主眞性に七箇條の起請文を差出した。左に（源空は法然）

あまねく予が門人念佛の上人等につぐ

一、いまだ一句の文義をうかゞはずして、眞言止觀を破し、餘の佛菩薩を謗ずることを停止すべき事

一、無智の身をもちて、有智の人に對し、別解別行の輩にあひて、このみて諍論をいたす事を停止すべき事

一、別解別行の人に對して、愚痴偏執の心をもて本業を棄置せよと稱して、あながちにこれをきらひわらふ事を停止すべき事

一、念佛門にをきては、戒行なしと號して、もはら淫酒食肉をすゝめ、たゞ〳〵律義をまもるをば、雜行人となづけて、彌陀の本願を遷むものは、造惡をおそるゝことなかれといふ事を停止すべき事

一、いまだ是非をわきまへざる痴人、聖教をはなれ、師說をそむいて、ほしいまゝに私の義をのべ、みだりに諍論をくはだてゝ智者にわらはれ、愚人を迷亂することを停止すべき事

一、愚鈍の身をもつて、ことに唱導をこのみ、正法をしらず、種々の邪法をときて無智の道俗を教化する事を停止すべき事

一、みづから佛敎にあらざる邪法をときて、いつはりて師範の說と號することを停止すべき事

以上法然の起請文を提出せしは、當時南都北嶺の訴へ喧しかりしより、此の起請文を提出せしものと思はるゝが、此の起請文により、彼徒は他を別解別行の人と稱し、陽に他の信仰はもつともなりと揚げ、陰に念佛を唱ふ女性的宣傳は非常に人心を引付けたに相違なひ、南都北嶺の衆徒多くは口に學理を嗤々し、行法を云々しても其實行に至つては、敬服できないものがあつたろふと思ふ。榮花物語に或時宮中に於て大新禱會の時僧徒が何時になくあくびしたまわざるうれしとする。しかれば加持新禱の時など、僧侶の隋氣が思ひやらるゝ。

しかし念佛の徒輩、口に念佛を唱へれば道德倫理は顧みるに及ばずとの說行はれしは事實であつて、又た倫道を亂だした者往々あつた事と思ふ。よしこれが淨土經の經意でなきは勿論、法然と雖もかく教へざりしものなるべきも、他力主張と厭世思想と交錯し此の弊害を來たす邊があることを注意せねばならぬ、現に法然の末流が、自害往生、燒身往生、入水往生、斷食往生等は末代には甚酌すべしと云てをる處を見ると、斯の如き往生は澤山行はれたるものにして、いかに往生思想の害毒を知るべしである。

親鸞は。

父母の孝養のために、一遍にても念佛まうしたること、いまださふらはず。

と云ふてをる、親鸞は一切有情はみな世々生々父母兄弟なり、故に往生して後皆な悉く助けんとの意と

するも、餘りに現在を否定し、惡平等觀に流れ、末來觀にのみ重きを置てをる思想は、到底國家を思ひ倫道を敎ゆべき思想でなひ。

或は親鸞が父母の爲めに念佛せざるところが偉大てある、とらわれぬところてあると云ふものがあるが、其れがそも〳〵宗敎に對する重大の誤解てある、佛陀の慈悲は廣大無邊なりと雖も、單に漠たるものてない、もし佛敎が現在の國土を忘れ、有緣を顧みるものてなひとしたならば、人生には要なきものてある。

元來法然親鸞は稱名念佛を骨張するの餘り、三部經の經意を無理に解釋した邊がある。聖日蓮の常に國家を憂ひ父母を追慕せし思想と、誠に天地雲泥の差と云ふも譬ふべき辭がなひ、是れ聖日蓮の法華經主義の思想と、親鸞の淨土思想と分岐する所以にして、注意すべきてあらふと思ふ、信仰は單に個人の利害のみならず國家社會に非常に影響を來たすものにして、政治、經濟の如く直接目に見へざるも、水の浸潤する如く知らず〳〵人心を左右するものてある。

法然が提出せし起請文連署者八十餘名の內て、敎義上、信仰上、面白ひ一二を擧ぐれば、幸西と云ふ人は彌陀の解釋に就て、迹門の彌陀、本門の彌陀といふことをたてゝ、十劫正覺といへるは迹門の彌陀、本門の彌陀とは、無始本覺の如來にして、我等所具の佛性とまたく差異なし、この謂をきく一念、ことたりぬ、多念の數遍、はなはだ無益なりとて一念義を主張し、幾分彌陀を敎義的に解釋した爲めに、法然は大禁物てあるから、直に破門した。

熊谷蓮生坊直實と云へば、平家沒落にはなくてならぬ人て、劇にもいろ〳〵しぐまれてをるが、此人大の往生思慕者て、何時も西を背にしたことがないと云ふ位、併し一番困つたのは京より關東に下るとき西を背にせざれば來る譯にゆかなひ、こて一案を考へ、馬に鞍をさかさまにおき、自分もさかさまにのり、口をひかせてとう〳〵關東へ來たことがある、いかに西方極樂を欣ふてもこれてはひどひ譯てある。

又た婦人を引入れる記述として法然は「女人は日本靈地靈驗の砌にはみなこと〳〵くきらはれたり、比叡山は傳敎大師の建立、大師みづから結界して、谷をさかひ峰をかきりて、女人の形をいれず、されば一乘峰たかくして、五障の雲たなびくことなく、一味谷深くして三從の水流るゝ事なし、高野山は弘法大師結界の峰、眞言上乘繁昌の地也、三密の月輪あまねく照すと雖も、女人垢穢の垢をはすゝかず、聖武天皇の御願、十六丈金剛の舍那はるかにこれを拜見するといへども、なほ扉の內にはいれず、天智天皇の建立五丈石像の彌勒あふぎてこれを禮拜すれども、なを壇の上には障あり、乃至金峰の雲の上醍醐の霞のそこ、女人更にかげをさゝず、悲哉、兩足ありといへどものぼらざる法の峰あり、ふまざる佛の庭あり、耻哉兩眼あきらかなりといへども、見ざる靈地あり、拜せざる靈像あり、此の穢土の瓦礫荊棘の山、泥木素像の佛だにも障あり、いかにいはんや衆寶合成の淨土萬德究竟の佛をや、これによりて往生そのうたがひあるべし、かるがゆへに此理をかゝみては別に四十八願の中の第三十五の女人往生の願ある理由なり」と述る處、いかにも女人を引付け我も〳〵と婦人に往生思想を鼓吹した邊、たく

みの者である。

婦人吸引の巧妙により、建永元年十二月九日、後鳥羽院、熊野山に臨幸あらせられしとき、後の門徒住蓮安楽等、東山鹿が谷に於て、別時念佛をはじめ、六時禮讃をつとめました、其時のあの拍子、哀歎悲喜の音曲は悲常に人口の耳を傾けしめ、遂に御所の御留主の女房も出家しましたから、後鳥羽院御還幸の後逆鱗ありて、六條川原に安樂を死罪に行ひ、法然親鸞等流刑に處せられたのである、安樂等果して不正の行爲ありしや否や知るべからすと雖も哀音念佛のいかに人心を引付けたか想像するにかたくない。

日蓮主義より見たる無量義經（第四回）

井村日咸

又善能知諸根性欲——無量大悲救苦衆生

（三、五——四、四）

本節は第四に五味の説法を敷ず、文中自ら五時に分かる、一に「又善能知」より「隨順能轉」までは乳味の説法を敷ず、此五段は如來の五時の説法に擬して説法するを敷じたのである、乳味の説法は如來最初に衆生の機根を鑑み給ふて其智識の程度を試驗せられたのであるが、今經にはそれを「善能く諸の根性欲を知り」と云ふたのである、陀羅尼無礙辯才とは其説法の内容を言ふたので、陀羅尼とは總持と翻譯し、一切の善を持して失せず惡を持して生ぜざらしむるを云ふ、又遮持と翻譯する、空有二邊の惡を遮して中道の善を持つのである、此に四種あり、法、義、呪、忍の四陀羅尼で、一切諸法の法體、義趣、呪願、安忍を體得するを云ふのである、無礙辯才とは無礙智を得て其辯説融通するを云ふので、此にも四種ある、義、法、辭、樂説である、一切諸法の義理に通達して滯ること無きは義無礙、一切諸法の名字に通達するは法無礙、義理名字に通達し一切

衆生の殊方異語に隨順して其が爲に演說し理解を得せしむるは辭無礙である、一切衆生の根性に隨順して聞かんと樂ふ所の法を說いて礙滯無きを樂說無礙と云ふ、要するに菩薩の說法は一切衆生の根性欲に適應したるものであることを示し、其說法は諸佛の說法に隨順して轉じ給ふことを云ふたのである、二に「徵滯先墮」より「致法清涼」までは第二時酪味の說法を敷ず、乳味の說法に於て衆生の根性鈍重なるを知り三乘の方便を以つて化導し給ふたのであるが、一切衆生は自己現實の苦惱に沒在して、如何にしてか此苦惱を脫せんかと悶きつゝあるので、先づ其苦惱を免れしむる敎を與へられたのが第二時の說法である、而もその敎法は如來の敎法の中では最淺劣の敎なるが故に、徵滯と云ふたので、其小さき敎を以て衆生の欲塵即ち煩惱を治し現實の苦惱より解脫せしめた、涅槃の門を開き解脫の風を扇ぐとは如來の敎法の意味を言ふたので、世の惱熱を除き法の清涼を致すとは其敎法の效果を擧げたのである、

「次降甚深」より「苦聚日光」に至るまでは第三に生蘇味の說法を敷ずるのである、第二時に於て現實の苦惱を除きし儘て、其以上に向上の途を與へて居なかつたので、第三時に於ては更に向上の法を說き與へた故に甚深の十二因緣を降しと云ふた、其意義を甚深ならしめて理解する處を深からしめたのが第三時生蘇味の說法である、第四に「爾乃洪注」より「發菩提萠」に至るまでは熟蘇味の說法を敷したのである、酪味生蘇味の說法に依り衆生の根性大に進展して菩提に進趣せんとするの域に入つた有樣を說いたのである、洪に無上大乘を注ぐとは前三時に荒扱しを仕て置いた即ち煩惱の垢を磨出して置いたのを洗ひ流したのが、第四時の說法である、故に無上大乘の水を注いで、衆生の善根を潤し菩提の萠を發さしむると言ふたのである、第五に「智慧日月」より「救苦衆生」に至るまでは醍醐味の說法を敷じたのである、前四時に於て調機調養し漸く眞實の敎法を與へ得る迄に到達し得たことを智慧の日月方便の時節大乘の事業を扶蔬增長すと云ふた、遂に一佛乘に到着するが故に疾く阿耨菩提を成ずるを得せしむと說いたのである、常住快樂微妙眞實とは、佛果の常樂我淨の四德を滿ずるを讚歎したのである、以上の五時說法の次第は三世諸佛說法の儀式に隨順して能く說くが故に、菩薩說法の德として歎德したのである。

是諸衆生眞善知識――――威伏衆獸
難可徂壞

（四、四――五、三）

本節は第五に利他の十德を敷ず、「眞の善知識」とは第一に善友の德を明す、邪僻の道を說かざるが故に善友なり、「大良福田とは」菩薩犯戒の失無きが故に福田と云ふ、此は第二に福田の德を擧ぐるなり、「不請之師」とは常に鑑機三昧に住するが故に必要に應じて敎化を垂る、此は第三に應時の德を明すなり、「安穩の樂處」とは第四に安穩の德を明す、衆生の危苦を奪ふて無盡の燈明を與ふるが故なり、「救處護處大依止處等」とは第五に救護依止の德を明すなり、苦惱あるものは此に歸依すれば苦を救ふが故に救處なり、怖畏あるもの此に歸依すれば能く擁護するが故に護處なり苦を拔き樂を與ふること、佛を除いて比ぶべきものなきが故に大依止處と云ふなり、普門示現して應化說法するが故に導師と云ふ、能く通塞

を知り寶所に誘引するが故に大良導師と云ふのである、「能爲衆生盲而作眼」より「顚狂荒亂作大正念」に至るまでは第六に令具六根の德を明すなり、盲たるに眼目を作るとは眼根を具せしむるなり、聾則瘂の者の爲に耳鼻舌の三根を具せしめて具根のものと爲さしむ、眼等の五根は形像の上の具足を得せしむるのであるが、意根の缺失するものは即ち顚狂荒亂なるものである、精神的に何等修養する處なきものは、縱令正氣のものと雖ども意根具足のものとは言ふことは出來ぬ、今は菩薩教を說いて精神教化の爲に活動するを意根を具足せしめ大正念に住すると爲すなり、次に「船師大船師運載群生度生死河置涅槃岸」とは第七に能度二死の德を明す、分段の河を度すを船師とし、變易の河を度すを大船師と名づく、六度の船を作り二死の海に浮べ、此迷岸より彼覺岸に運載するを言ふたのである、分段の生死とは六道界內の生死であり變易の生死とは三乘界外の生死を言ふので、菩薩は一切衆生を淸度して一佛乘の覺岸に到達せしむるが故に船師に譬へたのである、次に「醫王大醫王」より「令衆藥服」に至るまでは第八に應病授藥の德を明すので、世間出世間の病相を分別し、其病に隨ふて授藥す、多貪のものには不淨觀を說き多愼の者には慈悲觀を說き、愚痴多きものゝ爲には因緣觀を說きて其病を治せしむること、世間の醫師の病に應じて藥を與ふるに等しきが故に醫師に譬へたので、出世間の病を治するが故に醫王なり、三乘の人を治するが故に大醫王と云ふなり「調御大調御」より「調不能調」に至るまでは、第九に調御放逸の德を明すなり、人天二乘を調ふるが故に調御師なり、四教の菩薩を調ふるが故に大調御師なり、菩薩能く一切の放逸の行あるものを調へて放逸なからしむるを調御師に譬へたのである、調御師とは現今言ふ調馬師の事である「師子勇猛威伏衆獸難可徂壞」とは第十に伏外道の德である、菩薩外道の法の中に於て怖畏する處なく之を折伏すること師子王の如くなるに譬ふ、以上の十德は凡て此利他の德である

遊戲菩薩諸波羅密於如來地堅固不動安住願力廣淨佛國

（五、三——五、四）

本節は第六に自利の德を嘆す、諸波羅密とは十波羅密である、如來の地とは忍辱の地である、願力とは四弘誓願である、佛國を淨むとは上に菩提に進趣するを言ふ。

不久得成阿耨多羅三藐三菩提

（五、四——五、五）

本節は第七に金剛心位を明すなり、補處に居するが故に不久得成である。

是諸菩薩摩訶薩皆有如斯不思議德

（五、五）

第八に結歎、以上菩薩の德を歎じたのを結すんだのである。

少年欄

童話

博士と泥棒

古田昂生

フランスのある町に——

ヂンとゆう醫學博士がありました。

ヂン博士は立派な「ヂン博士醫學病院」の院長さんでした。

たいへん人の病氣をなほすことが上手で、親切で、おとなしく、またあわれみ深い人なので、町の人たちはヂン博士を生神さまのやうに、うやまつてゐました。

ある人などは朝起るとすぐ

「ヂン博士さまが、今日もおたつしやであるやうに」

とお祈りまでしてヂン博士が毎日丈夫でいつまでも生きゐることをねがつてゐました。

ヂン博士は殊に貧乏人たちに對しては、自分のことを捨てゝおいてゞも一生懸命看病しました。

そればかしでなくまたヂン博士は大へんな勉强家でありました。

自分の病院でお金持の病人でもお金を少しも持つてゐない病人でも、みんな同じやうに診察するとすぐ、自分の研究室へ入つていろ〳〵藥についてしらべてゐました。

飯を喰べるのと、寢る外はこの研究室を出たことがございませんでした。

いや、時によると御飯のことも、寐むことも忘れて一生懸命に勉强してゐるのでした。

ヂン博士のお友だちの一人がヂン博士が餘り勉强し過ぎるので、今に病氣になるかも、わからないのでたいそう心配しました。

『よし、一ッ賑やかな街に出ていろ〳〵のことを見せて時には氣晴をさせてやる必要がある』

と思つて、すぐ博士の家を訪問しました。

『ヂン君！街へ遊びに行かうではないか』

『いや僕は一寸しらべものをしてゐるからこの次にしよう』

『然し、しらべもの、しらべものと、そんなに勉强ばかりしてゐると今に病氣になるぜ』

『有難う。けど、僕は矢張り、こうやつて藥をいろ〳〵しらべて、病人を一人でも多く助けてやらねばならぬからなァ』

『がだメ。君！君がそんなことで病氣にでもなつてみ給へ、しらべものをすることも病人をみてやることも出來なくなるぢやないか』

『うむ』

『さすれば、君は體を丈夫にしていつまでも生きてみんなを助けてやらねばいけないだらう。』

『さうだネ』

『だから僕と街へ散歩にゆかう』

『だけど』

『ゆかう〳〵』

とうどうお友だちはヂン博士を連れ立つて街へ散歩に出ました。

するとある街で大變な人だかりがしてゐました。
『何事だらう』
二人はいそいでそこへ行つてみると澤山の人の中に一人のみすぼらしい男が押へられてゐました。
――泥棒――
みんなが『泥棒だ！』『泥棒だ！』
と云つてゐました。
ヂン博士もその泥棒を見ました。
そのみすぼらしい男は、もう逃げることが出來なくなると『アハ……ハ……アハッ……ハ……』と笑ひ出して、さて落ちついて
『やア、諸君！　私は泥棒でございます。まちがひもない、ほんとの泥棒です。即ちですなア。
私は泥棒を商賣にしてゐる、泥棒屋です。處、て、みなさん、みなさんは泥棒屋と云ふ商賣をたいそう嫌はれますが、こんな面白い、愉快な商賣はありませんよ。
私がこうゆうとなんだか、負けおしみをするやうて、いけませんが、實際です。
みんなが愉快に寝てゐる處へソッと忍び込んで、だいじに、だいじにしまつて置く、お金だの、寶もものだのを、ウンとこさと、懐へ入れて、さよなら、してくることなんか、働かないで、すぐお金もちになれるんぢやないですか。
私が忍び込んだ翌る日はみんなが、大騒ぎする。ハッハッハ……。愉快々々」
人々は只だこの泥棒にあきれてゐました。
そこへすぐ警官が大ぜい來て、その泥棒を連れて行つてしまひました。
ヂン博士はその泥棒をいつまでもいつまでもみてゐました。
それからぢきに友達と家へ歸つて來ました。
矢張りすぐ博士は研究室へ行りました。
研究室で博士はつくづく考へました。

×

人間はどうして、いゝ人と惡い人とあるだらう。
なぜ惡るい人が出來るだらう。
惡るい人の心のなかはどんなであるだらう。
薬で惡るい人といゝ人とを作り別ける事が出來ないだらうか。

×

博士は之れだけを今度は一生懸命に考へました。
それからは博士は惡い罪人の死刑になつた人の腦や血液やをもつていろ〳〵と研究しました。
ヂン博士の研究はとうとう成功しました。
ヂン博士は白いビンと青いビンとの二つのビンに薬を入れました。
青ビンの方の薬をのむと世にも怖ろしい大惡人になるのです。
白ビンの方の薬をのむともとの通りのいゝ人になれるのです。
『占た！』
『よし、これからわしはこの青ビンの薬をのんで、惡人になつて惡人はどんな心持で惡いことをするか試驗してみよう』
こう思ふて或夜、ひそかに青ビンの薬をのんで泥棒を働きに出掛けました。
ある金持の家へ寝静つてゐる眞夜中にソッと忍び込んで、そこの中の寶物を全部盗んで來ました。
そして家へ歸へると白ビンの薬をのんでもとヂの

ン博士になつてゐました。

處が――

どうしたものか惡人になると惡いことをするのは平氣になつて少しも、思つたより心配がありません。その中に惡いことをすると云ふことが面白くなつて來ました。

夜になると青ビンの藥をのんで出掛けました。

そして夜明に家に歸つてくると白ビンの藥をのんでもとのヂン博士になつてゐました。

その町は、その町が始つて初めての大騷ぎが始まりました。

一人の怖らしい泥棒がその町の金持を一軒のこらずお金や寶物を盜んでゆくのです。

そしてしまひには毎日のやうに誰かゝ殺されてゐるのです。

町の人たちは生きた心持がありません。

『早く泥棒をつかまへて下さい』

と町の人は大ぜいてその町の警察署へ押寄せて署長さんにたのみました、署長さんも、お巡りさんも、夜も寢ないて、その泥棒をつかまへるのに苦心してゐました。

けれど却々つかまりません。

が、相かわらず、寶物は盜まれるし、人は殺されるのです。

――ある夜――

とうとうその泥棒はお巡りさんの一人に見付けられました。

お巡りさんは用意の笛を

『ピリ〳〵〳〵』

と吹きました。すると町の角々に立つてゐたお巡りさんは忽ちその場へ集りました。

『おい、あそこへ逃げてゆくからつらまへよ』

一人が大きい聲をすると五十人ばかしのお巡りさんは

『それッ！』

と追ひかけました。

泥棒は一生懸命逃げてゆきます。お巡りさんも一生懸命追つてゆきます。

とうとう泥棒は逃げ場を失つてしまつて「ヂン博士醫學病院」の中へ逃げ込みました。

お巡りさんたちはすつかりその病院の表門も裏門も取卷いてしまいました

×

その泥棒はヂン博士なのです。

始めは惡い人の心はどんなだらうと試驗する爲に泥棒をやつたのですが、しまいには面白くなつて毎日泥棒したり、人を殺したりするやうになつたのです。

家へ歸ると白いビンの藥をのんで、もとの博士になつてゐたのですが、とうとうお巡りさんから追ひかけられて自分の家まで、逃げのびて來ましたのです。

『さあ、白いビンの藥をのんでもとの博士になつてお巡りさんたちをだましてやらう』

そう思つて研究室へ入つて白いビンの藥をのもうとすると

『しまつた』

博士は頭がグラ〳〵としました。

『おゝ、白いビンの藥が無い』

そう云ひ終ると博士はバッたり倒れました。

『しまつた』

そう思つて窓の外をみると病院のぐるりには警官が十重二十重に取りかこんでゐるのです。

『わしは、つまらぬ考へを起したばかりに、こんなことになつたのだ、大ぜいの人に迷惑かけたり、お巡りさんたちに手數をかけてほんとにすまない』

博士は涙をポロ〳〵こぼしました。

『そうだ、私は死んでお詫びせやう』

と決心しました。

×

『ポン』

ピストルの音が聞こえたので、外に番をしてゐた、お巡りさんは

『博士と泥棒と取組みあつてゐるのだ、早くみんな行つて、博士を助けよ』

と大ぜいのお巡りさんは中へ入つてみると研究室に博士だけまツかになつて死んでゐました。

そうして泥棒の姿はみえません。

警官は何んだか判らないのでポカンとしてゐました。

然しそれからはその町はもとのやうに平和になりました。

――をはり――

記事

統一閣法戰錄

△五月廿七日午後七時土曜講義、「開目抄詳解」木村日保師。「無量義經講義」井村日咸師。△同廿八日午後一時日曜大講演、「我等の呼び」野間徹安君。「光輝ある生活」森川泰修師。「佛教大觀」本多日生猊下。△六月三日午後七時土曜講義、「開目抄詳解」木村日保師。「無量義經講義」井村日咸師。△同四日午後一時日曜大講演會、「佛教の教相論」星野純義師「得氣面榮」小西日喜師。「佛教大觀」本多日生猊下。△同十日土曜講義、「開目抄詳解」木村日保師。△同十一日日曜大講演、「慈激の生活」和賀義見君、野老乾一師。「佛教大觀」本多日生猊下。△同十七日土曜講義、「開目抄詳解」木村日保師。「無量義經講義」井村日咸師。△同十八日日曜大講演、「無住の木」藤啓純君。「生活の意義」長谷川義一師。「慈悲は力なり」武田親龍師。△七月一日土曜講義「開目抄詳解」木村日保師。△同二日日曜大講演會、「文化生活の基調」大川孝準君。「慈悲と愛」森川日修師。「佛教大觀」本多日生猊下。△同八日土曜講演會、「開目抄詳通」木村日保師「無量義經講義」井村日咸師。△同九日日曜大講演會、「信は力なり」山口智光君。「赤裸々で來い」秋山乾英師。「護木尊供養御書」野口日主師。△同十六日自慶勞働慰安會、午後一時より、「國の寶」小林一郎先生。其他余興あり。△七月廿三日日曜講演會、午後七時半より「國史と日蓮」大谷内越山先生。「木尊に對する信仰の位置」安田臺城師。「日蓮主義綱要」井村日咸師。△同廿日日曜講演會、午後七時半「國史と日蓮」大谷内越山先生。「先つ指導者を撰定せよ」高木日靖師。「開目抄詳解」木村日保師。△同八月六日日曜講演會、午後七時半「國史と日蓮」大谷内越山先生。「完全の人」伊豆凡夫閣下。「日蓮主義綱要」井村日咸師。△同十三日日曜講演會、午後七時半「國史と日蓮」大谷内越山先生。「思想改善の根本義」安田臺城師。「開目抄通解」木村日保師。△八月廿日午後七時半日曜講演、「生活の根本條件」長谷川義一師。「現代と日蓮主義」小野練堆師。「日蓮主義綱要」井村日咸師。△同廿七日午後七時半日曜講演、「國史と日蓮」大谷内越山先生。「生活の意義」高木日靖師。「信仰と力」小林一郎先生。△九月三日午後七時半日曜講演、「國史と日蓮」大谷内越山先生。「精神の訓練」安田臺城師。「開目抄通解」木村日保師。△九月十日午後七時日曜講演會、「國史と日蓮」大谷内越山先生。「現代の世相を悲しむ」安田臺城師。「日蓮主義文化運動」野口日主師。△九月十七日午後一時日曜講演會、「金光明經より法華經へ」秋山乾英師。「明徹を貴ぶ」笹川日堂師。「佛教大觀」本多日生猊下。

各地教信

八月京都活動史　八月一日於本山國詩會修行後講演、「精神の極致と信仰」豊田通泰師、同日夜於境内大天幕内健兒會例會第三回會員聯論練習會開催、久世、德田、名和、其他男女會員數名交々壇上

に立つ終りて、「正直と不正直」辻啓次君、の童話ありたり。△同五日夜　於本山境内納涼講演開催七月の盛會に續いて吾等若人は聲の限りに腐長舌を震ひ京都六十萬人士の眠を覺さんとす。「個人國家及宗教」小林啓善氏。「軍備問題と日蓮上人」豐田通泰師。「唯我一人能爲教護」萩原日道師。△同六日夜　於境内天幕内健兒會例會、「時計の話」二木薫次君。「明智光春」有田宏道師。△十日夜　納涼講演、「人間味」小林啓善氏。「世人の所謂親鸞とは」別所小三郎氏。「日蓮主義の權威」萩原日道師。△同十一日夜　健兒會例會、「眞心」東京帝國大學生山口智光君。「僧の話」豐田通泰師。△同十五日夜　納涼講演、「隣目鈔感讀」有田宏道師。「佛陀の大慈悲」萩原日道師。△同十六日夜　健兒會例會「金の鍋」山田篤三郎君。「水月と天月」豐田通泰師。此夜父兄及大人多數の參觀者あり健兒會後「人間の慣性」豐田通泰師。△同十七日　川東本正寺に於て施餓鬼會修行後講演、「三十二相八十種好に就て」有田宏道師。△同十九日　於本山大施餓鬼會修行後講演、「盂蘭盆の宣揚及教訓」豐田通泰師。△同二十日夜　納涼講演、「人生の幸福」大川孝準師。「淨土より法華に入る迄」中山正之氏。「親鸞主義將して今日に遡せりや」別所小三郎氏「佛陀三輪の妙化」萩原日道師。△同二十一日夜　健兒會例會、「正直者」林玉光君。「遺の夢」林誠一君。「お化の正體」小林啓善君。「正直の德」土持良達師、保護者多數來會す依りて、「造化は風伸なり」小林啓善師。△同二十五日夜　納涼講演、「成功と天職に就て」小林啓善師。「正義の信仰に來れ」大橋立次郎氏。「佛教研究の教準」土持良達師。「日蓮主義の佛陀觀」金光孝禎師。△同廿六日夜　於本山講堂健兒會例會、「飛行機の話」山田篤三郎君。「佐野鹿十郎少年時代」林玉光君。「富士登山實驗談」高岡主事。「王華と王陽明」有田宏道師。△同廿八日　於本山開山會修行後講演。「不可思議」有田宏道師。△三十日夜　納涼講演最終日。「日本國將來の佛教」小林啓善師。「道德の根底と信仰の極致」豐田通泰師。「信仰は力なり」有田宏道師。「法華經の通解」萩原日道師。

已上八月中の活動に依り數名の新信者を得て俱に法悅の意味を喜ぶ一天四海の大理想に一歩一歩と近づきつゝ眞體同心堅き決意を御寶前に誓ふ。

第三教區布教團の活動

七月八日　長柄村光明寺に例會を開き諸般の協議と各自の信仰談を交はし將來の發展を祈願し同月十九日茂原町市場に於て、秋葉、木村、海老澤、竹内の各師熱誠を以て現代思想の缺陷を鞭打し大に日蓮主義の信仰に活きんことを熱論以て獅子吼したり。△八月二十日　鶴村本法寺に於て、青年修養團の請に依り幻燈布教を開きたり聽衆凡そ六百有餘頭る盛大なりき。△八月廿二日　片貝村荒生納屋に於て戸村啓藏氏の主催を以て片貝村修養會の爲めに宗祖聖人御一代幻燈を影寫して聖人の人格及主張を懇切に說明したり海老澤師外數名。△八月廿五日　茂原町圓藏寺に例會を開き、秋葉、木村、山本、長岡、宇津木、芹澤、同元の各師出席。△九月十五日　片貝村小關妙覺寺に於て日蓮聖人御一代の幻燈を應用して懇切丁寧に日蓮聖人の信仰と活動と其の一代の行化を說明したり海老澤乾樹、山本賢乘外數名。△九月十八日　長柄村飯尾寺に例會を開き、秋葉、木村、海老澤、宇津木、芹澤、同元の各師出席本圓の活動上の方法を協議し翌十九日は全員總出にて茂原布教を開演することを約して同會各自坊に歸る。

馬來田教報

八月十五日　馬來田青年會の懇請により午後一時より學校講堂に於て講演會を開催(聽衆三百八十名)「感謝の生活」德會秩「農村青年の指針」石原社會主事。「世界的理想と國民の信念」笹川日堂師。笹川智正の熱誠溢るゝ講演に感激したる結果、△九月二日　同村在鄕軍人分會を學校に開催するに當り教務部長川崎英照師を講師に午後一時より開會(聽衆五百名)「軍人精神」德會秩「軍縮と吾人の用意」佐倉聯隊司令官。「心働かば身動く」川崎英照師。右講演に滿堂立錐の餘地なく學校の庭前に立聽せる盛會を呈し夜間講演を懇請せられ午後七時より本立寺に開催。「宗教の必要と其選擇」川崎英照師。信徒永島星野兩氏答辭午後十時閉會本村は眞言宗九ケ寺尊宗七ケ寺顯本としては本立寺一ケ寺村の中央に位し各信徒の來訪繁く日蓮上人讃仰の精神日に加はり信念要求の時運なれば此の機會に於て更に一段の宣傳を試み時に應じ先哲の講演を仰ぎなば近く好成果を得べきなり。

宗學林生の夏季實習布教

久しく諸師を待ちてゐた實習布教も學生の熱烈なる求道の信念に依つて愈々本年より再び實現することゝなつた。△七月十九日午前十時布教團の一行は東京驛を後に巡錫傳道の門出に上つた。其の夜第一回の叫びは三島町本妙寺に開かれた先づ勞頭壇上に叫んだのは鶴澤泰溫君で演題は「佛陀の大慈悲と吾人の信仰」の題下に熱辯を振つた、次には中野信良君の「東雲を墓ひて」の題下に氏獨特の辯を振つた、次に「教觀二門」の題下に藤啓純君の落着いた哲學者振りを示し最後に「宗教信仰の撲掃」の題下に星野純義君の酒々として水の流れる如き熱辯が叫ばれた。學生講演の後に補導栗原顯有師の「實生活と信仰」の題下に之れ又師獨特の妙辯を振はれた、かくして實習布教第一回戰は非常に盛大裡に終つた。△七月十九日午前十時布教團の一行は東京驛を後に巡錫傳道の門出に上つた。其の夜第一回の叫びは三島町本妙寺に開かれた先づ勞頭壇上に叫んだのは鶴澤泰溫君で演題は「佛陀の大慈悲と吾人の信仰」の題下に熱辯を振つた、次には中野信良君の「東雲を墓ひて」の題下に氏獨特の辯を振つた、次に「教觀二門」の題下に藤啓純君の落着いた哲學者振りを示し最後に「宗教信仰の撲掃」の題下に星野純義君の酒々として水の流れる如き熱辯が叫ばれた。學生講演の後に補導栗原顯有師の「實生活と信仰」の題下に之れ又師獨特の妙辯を振はれた、かくして實習布教第一回戰は非常に盛大裡に終つた。△五月廿六日出發〻閉會した、以下詳細の報導は紙數に制限がありますので大體だけにして置く。△二十日、松野妙松寺、聽衆約百五十名。△二十一日、什寶御靈蹟地たる吉美妙立寺、聽衆二百餘名盛會。△二十二日　豐橋妙國寺聽衆約百名。△二十三日は愈〻總本山妙滿寺に熱辯を振ふこととなつた、萩原部長を始めとして塔中部員悉く準備に盡されたことは一行の深く感謝する處であつた、健兒會員の君ケ代及宗歌に開會の幕は落された、土持主任の開會に次で各自信仰方面に或は倫理、哲學方面に又は史的觀社會觀の次面に大獅子吼した。△翌二十四日は大阪蓮成寺に。△二十五日夕同堂開寺に何れも聽衆百名。△二十六日は岡山縣和氣の本成寺に開かれた聽衆百五十名。△二十七日岡山市本行寺に於ては中川日史師能仁智正の幹旋に依り盛會、且つ婦人會、青年會の御盡勞を謝す、其の夜夜行列車で翌。△二十八日は見付玄妙寺の靈地に最後の獅子吼をすることになつた山本貫主の法勞に依り非常な盛會だつた聽衆約二百名、斯くして十日間の修學布教も先輩諸師並に檀信徒諸氏の熱誠に依り無事終了した一行の實習上に得た智識は實に甚大であつた。茲に重ねて紙上に於て先輩諸氏の法勞を深く感謝する、因に今回の實習布教は學生の活きた學術發表と信念の錬磨、地方信仰狀態の實地見學を本として行つたので從つて講演の內容も倫理觀、信仰部面、教義部面、日蓮主義史的觀察、社會觀の五に分擔して日蓮主義を論じたので內容の統絡する處いな〻一貫して日蓮主義の全部を知らしむることが出來るので聽衆にも大いに滿足を與へることが出來た。以上　(星野生)

常覺寺布教講演

左の日程の示す如く千葉縣山武郡豐成村常覺寺に於て中島元道師の各演題の如き布教講演を行つた。△五月廿六

大僧正本多日生師講述

法華經要文講義

日夜青年會「農村問題」△八月四日夜題目講「法華經の行者の迫害」△九日三日夜題目講「孟蘭盆に就て」△九月五日晝婦人會「迫害」△九月九日晝「施餓鬼とは何ぞや」△九月十五日晝「鍋かぶり日親上人」

法國少年會　名古屋常總寺少年少女會は今回法國少年會と改稱し依然として毎土曜日夜同寺本堂に於て例會を開き新愛知お伽團員、名古屋毎日新聞記者等數名講師となつて兒童課外教育に努めてゐるが法國少年會と改稱以來特に新會員を募り總ち二百餘名の少年少女を得、會員の中より幹事を撰定して各兒童に自治的に行動せしめてゐるが例會毎に會員の外數百名の兒童集合し之に父兄相伴つて來會して頗る盛會に好成績を擧げてゐる。

廣告

大正十一年十一月三日より八日迄六日間左記の通り社會教化講習會を開催す

一會場　東京淺草統一閣

一時間　毎日自午前九時至同十二時　自午後六時至同九時

講師及講題

（午前の部）

一佛教大觀　大僧正　本多日生猊下

一教觀綱要　僧正　井村日咸師

一未定　文學士　中川日史師

一社會運動に就いて　文學士　武田顯龍師

（午後の部）

一國民道德より觀たる現代思想　文學博士　深作安文先生

一儒教より觀たる社會問題　文學博士　宇野哲人先生

一社會教育に就いて　文部省社會教育課長　乘杉嘉壽先生

一社會事業要綱　內務省囑托　難波義雄先生

一未定　文學博士　井上哲次郎先生

一社會教化と佛教　大僧正　本多日生猊下

聽講數　迎聽講料金壹圓とす

主催　法明廳

顯本法華宗宗務會

して開權顯實の思想を飽く迄も明かにして參るのてあります。

將來復活すべき佛教は、決して方便の一部一角に留まるべきものてはない、又方便と方便とを互に認容し合うて、「それも宜からう」「これも宜からう」といふやうな所謂分裂的の佛教に安んずべき者てもない、それてあれば他の思想家が之を倒してしまふ佛教だけて天下を支配して居るものならば互に讓歩し合つて、妥協を以てその教が維持出來るけれども佛教を敵視して起る西洋の學問或は宗教、いろ〳〵なものがあるから、佛教を維持せんとする內輪の者が方便を互に認容し合つて、烏合の衆のやうな狀態で進軍するといふことは、思はざるの甚しきものてある、吟味に吟味をして、今佛が言はれた通りに「今我れ喜んて畏れ無し」と言はれる、何處に持つて行つても退を取らん、法華經に繩りをつけて佛教とは斯ういふものてあるとして、思想界に進軍をしなければならぬと考へるのてあります。之を日本人が了解し得ないといふ事は、自分等の如何にも解し難き所であつて、聖德出て、傳教出て、日蓮出てその點を論明したことは實に至れり盡せりてある。而して反面には佛教の弊害を批評した學者も多々ある、それは皆方便より來る佛教の謬弊てあること故に、今日佛教を復活するに就いては、その弊害の點を矯正して、世界的思想の中に十分の地歩を占め得るだけの宗教として復活を圖らなければならぬといふ位のことは、さう込み入つた問題てないかのやうに自分等は考へる次第てありますが、併し見渡す限りさういふ大切な點を談り合ふ人が日蓮主義者以外には殆んど無いかのやうに見えるのは、甚だ慨嘆に

堪えんことであると思ふ。これは何も日蓮主義者丙部の問題ではなからう、廣く外部から宗教の必要を自覺し、さうして日本には佛教の復活を圖らなければならぬ、圖るにはどうしたら宜いかといふ位の事を考へないで、漠然として居るといふのは、今尙ほ思想の事に對して責任ある觀察する人が少いのではないかと自分は危ぶむのであります。願くは諸君等と共にこの大切なる思想界の問題を明にして、我が國家および文明の爲に貢獻したいと考へる次第であります。

譬諭品第三

この品を譬諭品と題するのは、三車大車の譬によせて前段の開三顯一の教義を說明した爲めであります。さうしてこの品の組織は、初めに上根の舍利弗尊者の領解授記を敍し、後段に至つて三車大車の譬を詳說したものでありまして、偈の中に有名なる「今此三界」の文があります。又此の品には三界の四苦八苦を擧げて人生の缺陷を詳說されて居るのであります。法華經の教義は多く積極的であつて衆生の佛性を顯はす側を示されて居りますが、併し此の品に說かれた所の人生の缺陷に就いて覺醒を促された點は、消極的の教義に屬して居ります。けれども殊に記憶すべき所であります。

二五、然るに我等方便隨宜の所說を解らずして、初め佛法を聞いて遇ま便ち信受し、思惟して證を取れり、世尊、我れ昔より來た終日竟夜每に自から剋責しき、然るに今佛に從ひたてまつりて未だ聞かざる所の未曾有の法を聞いて、諸の疑悔を斷じ、身意泰然として快く安穩なることを得たり、今日乃ち知んぬ、眞に是れ佛子なり、佛口より生れ、法化より生じて佛法の分を得たり。

この所は即ち舍利弗の領解を述べた一節であります、舍利弗は、法華經以前の方便の佛法に對して、その方便たることを覺らずして、そこに心をとゞめ之を信受して而して證を得たりと思つて居つたが、それは誤りであつた。今法華經に來つて、未だ曾つて聞かざりし所の眞實の教を聞いて、「二乘の輩は永く佛に成らず」といふ佛の誡めは猶ほ方便であつて、人開會の場合には二乘も菩薩も俱に等しく佛性を具へ、向上して佛と成り得るといふ事を信解するに至つた。權大乘の諸經に於いては、二乘は種々の叱責を被むつた譯であつて、晝夜心を苦しめて居つたが、今や法華經に於て人開會の教を聞いて、種々の疑ひは殘りなく除かれ、まことに快く安心立命を得たのであります。さうして舍利弗は、今この法華經の場合に於て初めて自己が眞の佛子であり、佛の御口より教へられて菩薩行に入り、その教化の下に佛の覺に進むことを得たのであると言つて、大いに感謝したのであります。

この舍利弗の領解の中に、小乘のさとりと、權大乘の彈呵と、法華經の開顯との關係が、頗るよく示されて居るのであります。

二六、諸の衆生を見るに生老病死憂悲苦惱に燒煮せらる、亦五欲財利を以て

の故に種々の苦を受く、又貪著し追求するを以ての故に、現には衆苦を受け、後には地獄畜生餓鬼の苦を受け、若し天上に生れ及び人間に在つては、貧窮困苦、愛別離苦、怨憎會苦、是の如き等の種々の諸苦あり、衆生其の中に沒在して歡喜し遊戲して覺らず知らず驚かず怖れず、亦厭ふことを生さず、解脫を求めず、此の三界の火宅に於て東西に馳走して大苦に遇ふと雖も以て患と爲さず。舍利弗、佛此を見己つて便ち是の念を作さく、我は爲れ衆生の父なり、其の苦難を拔き、無量無邊の佛智慧の樂を與へて、其をして遊戲せしめんと。

この經文は、即ち三界は四苦八苦の悲なることを說き、而も衆生はこれを覺らずして居るので、佛は慈悲心を起して淸度の手を下すといふことを說かれた一段であります。多くの衆生は生老病死憂悲苦惱の四苦八苦に苦しめられ、而も苦を以て苦を捨てんとするの愚に座して、ます〳〵五欲感覺の欲望に陷り、財利を貪つて物欲に活きんとするが故に却つて種々の苦しみを受くるに至るのである。さうして此の苦みを除くの途に出てずして、ます〳〵五欲に貪著し、且つこれを追ひ求むるが故に、現在にも種々の苦痛を受け、尙ほ死して後の生には地獄、餓鬼、畜生の三惡道に墮ちて苦しみを受けるのであ

る。若し幸にして天上界又は人間界に生れることが出來ても、惡業の因緣を以て、貧困の苦み、愛する者に別離るの苦み、怨憎ある者に會ふの苦み、その他種々なる苦痛を受けるのである。而も衆生はその中に溺れて少しもこれに氣が附かず、却つて苦しみの中に瞬間の歡喜を追ひ求め、遊び戲れて、この人生の實相を覺らず知らず、驚かず怖れず、又この三界の苦に對して厭ひの心を生ずるに至らず、隨つて解脫をも求めず、左樣にしてこの缺陷多き、殆ど火宅に似たる人生に惑溺して、或は東に或は西に、五欲の樂を求めて、却つて大いなる苦しみを受けつゝあるのである。それ故に我れ釋迦牟尼は、この迷へる衆生を見て如何にも憐愍に堪へない、さうして是の如き念をおこすのである、我はすなはち彼等衆生の父として存するのである、それ故に彼等愍れなる子等の苦難に陷つて居るのを見ては、これを放任して置くに忍びない、どうぞしてその苦難を救ひ、さうしてこれに無限の佛の智慧より來る所の眞の樂みを與へて、その法悅、法樂の中に遊ばしめなければならぬ、如來は斯の如くに考へて、偉大なる衆生淸度の活動に就かれるといふことを說かれたのであります。

この一段の經文には、現實の人生の缺陷と、その中に生活して居る衆生の謬見と、さうして之に對する佛の慈悲救淸との關係が、よく示されて居るのであります。

二七、初め三乘を說いて衆生を引導し、然して後に但だ大乘を以て之を度脫す。

この一節は開三顯一の事を說いたものてありまして、釋尊が初めに聲聞、緣覺、菩薩の三乘を分別して說いたのは、全く衆生を導かんが爲めの手段に外ならなかつたのてある、故に最後に於ては大乘の開顯一乘の敎を示して、之を淸度するのてあると言はれた。この經文の詳しい說明は、前段の方便品に說かれた所でありまして、今は譬說といつて譬喩を正意とするが故に、法說としては簡單に說かれて居るのてあります。

二八、舍利弗に告ぐ、我も亦是の如し、衆聖の中の尊、世間の父なり、一切衆生は皆是れ吾子なり、深く世樂に著して慧心有ること無し。三界は安きこと無し、猶火宅の如し、衆苦充滿して甚だ怖畏すべし、常に生老病死の憂患あり、是の如き等の火熾然として息まず、如來は已に三界の火宅を離れて寂然として閑居し林野に安處せり、今此の三界は皆是れ我が有なり、其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり、而も今此の處は諸の患難多し、唯我れ一人のみ能く救護を爲す。

この經文は、釋尊の主師親の三德の義を明す所の最も大切な經文てあります。釋尊が自から宣言して言はれるには、今の譬喩に於て說いたやうに、大いなる宅に火事がいき居る、其の宅の主人が、子供等が床の下に火の廻つて居るのも知らないて遊び戲

れて居るのを見て、これを敎はうとしたように、「我も亦是の如し」——我か釋迦牟尼は三界の主てあつて、而も衆聖の中の最も尊い所の位地を占め、且つ世間の衆生の父てある、それ故に一切衆生は皆我が釋迦牟尼の子てある、而も此の我が子てある所の一切衆生は、深く世間の五欲の樂に貪著して居つて、眞にこの世間の實相を看破し、且つ之れを解脫しようとする所の智慧を有しない。元來この三界は決して安穩の世界ではない。恰も火事のいき居る家のやうな有樣てあつて、四苦八苦が充滿して居るのてあるからして、最も恐るべき所てある、即ち人生を大觀すれば、何人も生老病死の苦みを免れることは出來ない、而もその生老病死等の四苦八苦の火は熾んに燃え上つて、何人をも燒き盡さんとするものてある、たゞ如來は一人この三界の生老病死の火より遁れて、眞に平和安穩の生活に達して居るものてある、故に今此の三界——即ち宇宙全體は悉く我が釋迦牟尼の領有する所てあり、その中の一切衆生——すべての生きとし生ける者は、悉く我が釋迦牟尼の子てある、而もこの三界は諸多の患難が多く、即ち四苦八苦等に滿されて居つて、その苦みを脫することは容易てない、それ故に眞に此の三界の衆生の苦を敎はんが爲めに努力して居る者は、ただ我れ一人のみてあつて、而も我が偉大なる慈悲の力は、一人の力に依つて能くすべての衆生を救ひ了ることを得るものてあると說かれたのてあります。

この釋尊の主師親の三德の事は、古來頗る有名なる經文てありまして、今更多くの說明を要しないのてありますが、たゞ一言注意すべき事は、この主師

親の三德の中に於て、どれを最も大切な事として吾々の宗教心の中心を定めるかと申しますれば、それは「親」――すなはち父としての意識であります。それ故に今摘出した經文の初めにも「世間の父なり」と言ひ、又「皆な是れ吾が子なり」と說いて、父子の關係を最も重大なる事としてあるのであります。又壽量品に於ても「我も亦爲れ世の父、諸々の苦患を救ふ者なり」と說かれて、壽量品の場合には、三德を父の一つに於て纏めて說明されて居る位であります。

二九、我は爲れ法王なり、法に於て自在なり、衆生を安穩ならしめんが故に世に現ず、汝舍利弗、我が此の法印は世間を利益せんと欲するをもつての故に說く。

この一節は、釋迦牟尼如來が宇宙を支配する所の法王である事を說いた經文でありまして、釋尊みづから、我は即ち法王であると言はれた。その法王といふ意味は、宇宙の萬有に對して自在の力を有つて居り、而してその偉大なる力よりして、一切衆生を救はんが爲めに世に出現したものである。即ち上には宇宙の大眞理を握り、下には衆生濟度の手を下したものである。又この釋迦牟尼が法華經を說き、實相法印を示す――即ち哲學的の高遠なる眞理を示すのも、それは決して人生にかけ離れた事を說かうとするのではない、この人生を利益せんが爲めに說くのであつて、人生の事は、たゞ皮相の事柄のみに於ては救ふことは出來ない。實際問題は表面のみならはれてある。けれども、その奧にはすべて深き眞理を有するのであるから、その眞理の根柢よりして、表面の事實に現はれる事柄を判斷せねばならない。それ故に我が法印は一見非常に高いやうではあるけれども、その目的は實際の人生を救はんがために說くのであると言はれました。

この經文もまことに大事な教義でありまして、釋尊が法王である事と、釋尊の說かれる實相法印は實際の世間を利せんが爲めであるといふ事との二點は記憶すべき事であります。

三〇、汝舍利弗、尙此の經に於て信を以て入ることを得たり、況んや餘の聲聞をや、其の餘の聲聞も佛語を信ずるが故に此の經に隨順す、己が智分に非ず。

この經文は、智慧と信仰との關係を示す一段であります。して、舍利弗は、佛弟子中に於て智慧第一を以て稱せられたのであります、それ故に法華經に來つても、上根得道の代表者として擧げられて居るのでありますが、而もその舍利弗が此の經に於て證を得たのは、舍利弗の智慧が勝れて居るが爲てはなくして、彼の信仰を以て得たのであると示されて居るのであります。智慧第一と謂はれた舍利弗すらも、その智慧に依らずして、信仰に依つて救はれたのであるからして、その他の者は言ふを俟たぬ事である。すべて如何に智慧ある人でも、佛道を信ずる上に於ては、この佛の說かれし法華經に素直に隨順して行かなければならぬ。佛を信じその教を崇める從順の心の上に、眞の覺は得られるのである、舍利弗が今その覺を得たのも、決して彼が自己の智慧の力では

ないと言はれたのであります。無論法華經は智を排斥するものではありませんが、信を以て更に尊しと說かれて居るのであります。

斯樣にして譬喩品には、釋尊の衆生濟度の慈悲を說く事が頗る詳細であります。されば之こそ次の信解品に至つて、この譬喩品の數々を領解して居る所に於ても、亦釋尊に對する感謝のことが多いのであります。

信解品第四

この信解品は、中根の人達、すなち迦葉、阿難、目連、須菩提の四人の代表者が、前段の譬喩品の說を聽いて信解した所を述べたのであります。この「信解」の二字は重要なことでありまして、信を以て眞實の解を得るといふのが佛法の敎であります。智の結果に於て信を求めるのではなくして、信に依つて完全なる智に達し得るのであります。

さうして此の品の組織は、四大聲聞の領解として長者窮子の譬によせて、釋尊一代の化導の有樣を說いたものでありまして、その譬喩の說明が亦すこぶる巧妙を極めて居るのであります。天台智者大師が一切經を判釋した根據は、この信解品の說明によつたのであると言はれて居りますが、それ程に此の品はよく一切經の關係を譬喩に寄せて說明されて居るのであります。

三一、謂はざりき於今、忽然に希有の法を聞くことを得んとは、深く自ら慶幸す、大善利を獲たりと、無量の珍寶求めざるに自ら得たり。

この所は、中根の人達が人間會の敎に依つて成佛をゆるされた事を慶ぶのでありまして、我等は到底佛と成ることは出來ないと、悲みに沈んで居つたが今この法華經に來つて忽ち成佛をゆるされた、故に深く自から慶んで、大善利——すなはち成佛をゆるされたる事を感謝するのである。而してその慶びを譬によせて、恰も乞食をして居つた者が長者に引立てられて、その長者の有する一切の財寶を一時に讓り與へられた時の悅びと同じでありますといふ事を申述べて居るのであります。

三二、四方に馳聘して以て衣食を求め漸々に遊り行いて遇ま本國に向ひぬ、其の父先より來た子を求むるに得ずして一城に中止す。其の家大いに富んで財寶無量なり、金銀瑠璃珊瑚琥珀頗黎珠等、其の諸の倉庫に悉く皆盈溢せり。

この經文は、長者窮子の譬喩の中の一節であります。長者の子が小さい時にその家を拔け出て、流浪して四方に乞食をして、纔にその日〳〵の衣食を求めて汲々として居つた、さうしてたま〳〵その窮子が巡りめぐつて本國の方に向つて歩んで來たのであります、所が一方父なる長者は、自分の一子を喪うて非常に悲しんで、どうか一日も早くその子を探し得たいものだと思つて、方々を探ねて歩いて、或る一つの城に潛在して、さうして子供の行方を探ねて居つた、その父の家は頗る富んで居つて、樣々なる財寶が盈ち滿ちて居る、それは金銀瑠璃といふや

うな實が、多くの倉にすべて溢れて居る程あつた。これは即ち佛の功德、正覺の豐富にして且つ偉大なることを誓へたのであります。

さうしてこの摘出の經文には略してあまりますが斯樣にして長者の子が巡り歷つて遂にその父の家に近づいて來た、長者はその乞食のやうに落魄れて居る窮子を見て、直ちに是れこそ自分が朝夕求めて居つた我が子であるといふ事を識つて、すぐ樣親子の名乘をして家督を相續させようとしたけれども、その窮子は、父が今申す通りその家は非常に富んで居つて多くの人も使つて居り、威儀堂々たる生活をして居る、自分は見る影もない乞食であるものであるから、心に恐怖を懷いて、容易に自分が長者子たることを信じ得ない。そこで父なる長者はいろ〳〵に工夫を凝して、初めはその家の傭人として掃溜の掃除をさせ、それから次第に引立てゝ遂にその家の支配人として、最後にいよ〳〵家督を相續するといふ一段となるのでありますが、次に摘出する經文は即ちその家督相續の場合の事を說いた一節であります。

三三、此れ實に我子なり、我れ實に其の父なり、今吾が所有の一切の財物は皆是れ子の有なり。

長者はいよ〳〵その子が實子であるといふ事を取極めるために親族を集めて、その席上に於て披露して言ふには、この流浪して來た子は實は我が子であつた、我は實は此の乞食でありし子供の父である、それ故に今自分の有つて居るすべての財產は此の子供に讓り與へる、今日限りこの財寶は皆この子供の有であるといふ宣言をしたのであります。その時に親族中に一人の反對する者も無く、「成程さういふ事があつたと記憶する」といふやうな譯で、みな同意を表したが爲に、その多くの財寶は一擧にして乞食でありし子供に與へられたのであります。これが四大聲聞の領解として述べた譬喩でありまして、有名な長者窮子の譬といふのであります。

三四、大富長者とは則ち是れ如來なり我等は皆佛子に似たり、如來は常に我等を爲れ子なりと說きたまへり。

この所は合譬と稱して、すなはち法を譬に合せて說くのであります。今の譬に於て大富長者といふのは、他の方を指すのではない、すなはち今法華經を說かれつゝある釋迦牟尼如來御自身のことである、我等はみな佛子に似たりて、四大聲聞が自から言ふには、乞食をして居つた子供が家督の相續を許されたといふのは、即ち自分等の事である。その乞食から長者の家に雇はれて、僅かな賃錢を貰つて仕事をして悅んで居つたといふ所は、小乘阿含の境界を指すのである。「如來は常に我等を爲れ子なりと說きたまへり」で今から考へて見ると、如來の方は如何なる場合に於いても、我等聲聞をば、決して憎んで子にあらずと仰せられた事は無かつたのであるけれども、自分等が不心得にして佛子の自覺に達することが出來なかつた。即ち永く流浪して乞食をして居つた子が、長者子の自覺に入ることが出來なかつたやうな有樣であつたといふ事を、申述べたのであります。

三五、今法王の大寶自然にして至れり

佛子の得べき所の如きは、皆己に之を得たり。

ところが今法華經の開顯を聞いて、自分等の眞に佛子であることを領解し得て、恰も窮子が長者の財寶を悉く讓り受けたやうに、法王の大寶、すなはち釋迦如來のお覺りになつて居る所の智慧、慈悲、活動、一切のものは自分に與へられたのである、佛子として得べき所のもの、即ち智慧にもあれ、慈悲にもあれ、或は相の美しさでも、何に於ても、佛として具ふべき所の事柄は皆自分が與へられたものであると申したのであります。これも非常な歡喜の意を述べて居るのでありまして、而もその感謝が單に法にのみ向つて居らないで、所謂大富長者であるところの釋迦如來の慈悲に對して感謝して居るのであります。

三六、富める長者の子の志し劣れるを知つて、方便力を以て其の心を柔伏して、然る後に乃し一切の財寶を付するが如し。

吾々が今日まで方便の教を聞いて居つたのは、これは吾等の機根の然らしめた所であつて、如來の誤りではない、恰も富める長者が、その子供の志の下劣になつて居るが故に、いきなり我が子であると宣言しても之を信ずることが出來ない、己むを得ず方便の方法を用ひて、次第々々に番頭に取立て、その心が柔らいて、他人ではない、乞食ではないといふ風に、その家に親しみの附くのを俟つて、遂に親子の名乘を擧げたと同じ事である。我等が佛子の自覺に達し得ないが爲に、如來は種々の方便を以て導き給うたのである。それ故に佛が此眞實の教を說かれるのが遲れた原因は、佛の上に存するのではなくして、我等の自覺が遲れたが故に、佛は己むを得ずして方便の手段を施し給うたのである、恰度富者は一日も早くその子に家督を與へんとするけれども、子が何時までも長者子の自覺に歸らざるが故に、それが延びたのと同じ事であると言つたので、これは迦葉の偈として述べた中の一節であります。

三七、我等今は眞に是れ聲聞なり、我等今は眞に阿羅漢なり。

この所は聲聞といひ阿羅漢といふところの名前を開顯したので、すでに法華經に於ては、人格としては一切衆生悉く佛性有りといふ開顯をし、教としては三乘の教も畢竟一乘の教より說きしものである、その教を開顯すればやはり一つに歸するといふ事で、すでに人を開會し、教を開會したが、今この文はその名前を開會するのであります。聲聞といひ阿羅漢といふやうな名前が、何か菩薩と違つて存するものゝやうに思ふ、今日に至つても佛教徒の中には、聲聞といへばやつぱり聲聞だ、羅漢といへば菩薩とは違ふといふやうな考が殘つて居るが、それはこの法華經の今の經文を熟讀せざるが故に來ることである。そんな心の殘らぬやうにといふので、この經文は說いたものであります。

我等は今法華經に來つて、一切衆生に皆佛性があり、菩薩行を積んで佛に成れるといふやうな、菩薩の自覺、佛子の自覺といふものを得た、それが眞の聲聞である、聲聞とは、佛の聲を聞いてその教に依

つて進んで行く人といふので、この名が附いたのである。佛の聲を聞いてといふ、その佛の聲は、一切衆生悉く佛性あり、菩薩行に依つて佛に成れるといふ聲が、眞實の佛の聲なのでありますから、小乘の教、小乘の佛の聲を聞いたのでは眞の聲聞ではない、法華經の聲を聞いた者が眞の聲聞である、それ故に「我等今は眞に是れ聲聞なり」と言ふたのであります。又阿羅漢といふこともこれは梵語でありまして、譯して「應眞」といふので、眞實のさとりといふやうな意味であります。眞實のさとりの人といふことは、法華經に來つて初めて言ひ得るのでありますから、阿含經に於て言ふ阿羅漢は眞の阿羅漢ではなくして、法華經の開顯の教に依つて菩薩行に入り、成佛を許されたる者が眞の阿羅漢すなはち應眞である譯であります。

この經文は前申す通り名前を開顯して、一切經の上に差別の妄想が殘らぬやうにしたものであります。それ故に斯うなれば聲聞といふも、羅漢といふも、菩薩といふも皆同じものになつて、三乘が等しく開顯統一される譯なのであります。

三八、世尊は大恩ましまし、希有の事を以て憐愍教化して我等を利益したまう、無量億劫にも誰か能く報ずる者あらん。

この所は釋尊の大恩を感謝するのでありまして、初めから繰返して申す通りに、前の譬諭品でもやはり佛の慈悲が非常に強く現はれて居つた、したがつてこの信解品の領解を述べる一段に於ても、感謝の念が非常に強いからして、この品の最後に於て釋尊

大僧正本多日生師講述

那先比丘經通解

居つてはつまらないと云ふ事が分つたならば、自ら度脱する所の方法を執るものである。人が水に落ちた時には、うか〳〵して居れば死んでしまふから必らず水に浮び岸に上らうとする。人生の生活にもさう云ふ心が當然起るのである。「人皆智慧を以てその道徳を成ず」、この智慧と云ふのは人生觀である、淺薄なる智慧を成就すれば却つて罪悪を犯す。佛法に於ては、道徳は淨い人生觀を定めて、信仰の上に修養を積まなければ、精神的に苦みを感ずることが多いから、人生觀を得なければならぬと云ふ事を説くのである。それを領解した智慧、即ち人は信仰を打ち立て修養を重んじて行かなければ眞の幸福はないと云ふ事を領解して、人生觀の上より築き上げたならば、自から道徳を修めるやうになつて來る。今の社會の墮落腐敗は、餘りに物質に偏した結果であるから、この社會の缺陷を除くには、どうしても先づ個人が自覺しなければならぬ、そこに精神の修養が必要であり、思想の確立が必要であると云ふことになつて來る。人生は經濟と法律があればそれで宜いと云ふやうな淺慮が、遂に混濁の人生を造るに至つたのである。玆に云ふ如く領解したる人生觀、正しき智慧であれば、人は自ら道徳に進み行くべきものである。ここには人生觀と道徳の一致を説いて居るので、淨土宗が信心さへあれば道徳は要らぬと云つたのは、この人生觀の智慧が曲つて居るのである。今日までの文明に於て宗教や思想を輕んじたのは、要するに思慮の足らぬ人が多かつたからである。

王復那先に問ふ、何等をか孝順と爲すものぞ、那先の言く諸善者は皆孝順

を爲す、四善事あり心意の止まる所、言く何等の四か心意の所止とならむ、那先の言く、一には却欲、二には精進、三には制心、四には思惟、是を四と爲す、那先の言く、復た五效事あり、何等をか五となす、一には誠心、二には孝順、三には精進、四には盡心善を念ず、五には智慧なり、是を五と爲す、凡そ三十七品經皆是れ孝順を本と爲す、譬へば師匠の大城を圖作するが如し、先づ度量して基址を作り已つて乃ち城を起す。

この一節は六善事の第二の孝順の意義を明して居るのである。

彌蘭王が復た那先比丘に問ふて言ふには、どう云ふ意味が孝順と云ふのであるか。那先答へて、諸の善い事をした者は必らずや孝順を修めて居るのである。孝より發して諸の德は進み行くのであるから孝は百行の本と云ふのである。その意味を言明した所が如何にも偉い、如何なる善人でも、或は忠義の人でも、或は人道博愛の爲に働いた人でも、社會救濟の爲に働いた人でも、それは皆孝行の德性から發したので、親に孝行をしないで忠義を盡すとか或は他の善を爲すと云ふことはない。是が即ち我が國體の精華となつて居る所であつて西洋人の領解し得ない事である。西洋人は自我とかデモクラシーと云ふやうな事を言つて居るけれども　そんな事を言つて居つたのでは眞の道德ある人間は出來ない、間違つたのである。

人間ばかり多くなる。先づ恩に感じ、殊に親の恩に感ずる所から出發し、それから國體の恩に感ずると云ふ所に進んで行く、克く忠に克く孝にと云ふのは社會の德性を構成する所の根本である。忠と云ふも唯一の忠ではない、それを通して一切の德を實現して行く方法である。孝と云ふも唯一の孝ではない、それを通じて一切の德を實現して行く方法である。孝は百行の本であると云ふ所に我が國の精華は打ち立てられて居る。日本の學者もそれを知らない者はヘッポコ學者と云つて宜い、餘計な事は知つて居るけれども必要な事を知らない、帳面を附けるに千圓二千圓を書き落して、一錢二錢の小さいのを附けて居るやうなものである。それを那先が第一に答へて居る。總ての善事は皆親孝行をする所から出て居る、所謂「忠臣は孝子の門に出づ」と云ふ事を道破したのである。そこで孝に依つて四つの善い事がある、それに依つて人間の心が定まつて來るのである。それは何かと云ふと、一には人間の卑しい慾望を却けること、二には善い事を志してそれに奮勵努力すること、三には自制の考へ、煩惱の行くが儘にして置いてはいけない、放縱生活とか自然主義とか云ふが、あゝ云ふ劣情の赴くが儘にして置いてはいけない、さう云ふ心は抑へなければならない、それを西洋では抑へないで自我と云ふやうな事を言つて居るから馬の手綱を切つたやうなもので皆勝手な方を向いて飛び出す。西洋に於ては心を制する事を寧ろ野蠻なりとして、心の行くが儘にやりつ放しにせよと云ふのであるから堪つたものではない。四には「思惟」即ち正しき考を進べる方法を研究する。思惟と云つても唯物を考へると云ふ意味ではない、例へ

ば酒を飲んだり遊び事を考へたのはいけないと、人から意見を聞かないでも、自分から自分の心の働き具合を考へて行く。さうしてつまらない方の心を抑へて善い方の心に近付くやうにする、それが思惟である、この四つの事が大切であると說き、更に語り續けて言ふには、又五つの善い事がある。この「效事」と云ふのは有效な事柄と云ふ意味で、その事は善き結果を齎らす力となる意味であると思ひます。而してその五つは何かと云ふと誠信、孝順、精進、盡心善を念ずる（一生懸命善い事を念ずる）こと及び智慧である。この場合でも孝順と云ふ事を云つて居る。誠信と孝順を一二と云ふ順序に置いた所が宜いと思ふ。宗教の信仰が本になつて色々の德が導かれるし、德の修養の方からは親孝行が本になつて色々の德性が出來て來るから、この誠信と孝順の二つが先きに置いてあるのである。「凡そ三十七品經皆是れ孝順を本と爲す」この三十七品經と云ふのは、佛敎には三十七の善い事が說かれたお經があるが皆孝順が本である。即ち孝は百行の本と云ふも同じである。譬へば「師匠」と云ふのは大工の棟梁でありませう、大工の棟梁が大きな城を拵へるに先づその土地を測量して其處に礎を造り、それから段々に城を組んで行かなければならぬ。その土地を測量せず土臺を堅固にしなかつたならば堅牢なる城を造ることは出來ない。孝を說く所以は、唯孝だけに止まつて居らない、宏大なる城を造る地形のようなものである。測量が出來、地形が堅固に出來て始めて城が出來るのである。

王復那先に問ふ、何等をか精進する者と爲す、那先の言く、助善是を精進と爲す、那先の言く、譬へば垣牆の倒れんと欲するが若き傍より之に柱す、舍傾壞せんと欲するも亦復之に柱す、譬へば國王兵を遣はし攻擊する所有るが如き、兵少弱にして如かざるを欲さば、王復兵を遣はし往いて之を助くるに便ち勝つことを得ん、人の諸惡あるは兵の弱きが如し、人善心を持して惡心を消すこと、譬へば國王の兵を增して勝を得るが如し、人の五戒を持つは譬へば戰鬪に勝を得るが如し。

この一節は精進の意義を明したのであります。王樣が問ふて、どう云ふ事が精進と云ふのであります、魚を食はぬ事かと云ふと、さうでない。茄子とか人參とかを油で揚げたのを精進揚と云つて居りますが、精進とはさう云ふ事に使ふのではない、あゝ云ふ事は誰が言ひ出したか全然關係は無いのであります。那先が言ふには「助善是を精進と爲す」自分が目的とする所の善い事を助けて爲さしむる力それが即ち精進である。一の理想を打ち立てゝ、その理想を貫徹する所の熱烈なる努力が精進である。そこで善き目的を助ける唯一の力と云ふ意味に於て助善是を精進と云つたのである。更に那先が譬を擧げて之を說いて言ふには。樹根が倒れやうとする時に突つ張りをする、家が倒れようとする時に同じく突つ張りをする。又國王が戰を起して敵を攻める時に、此方の兵が負けさうだと云ふ場合には援兵を送るであらうが、それが爲に軍に勝つことが出來る、

恰度その通りであつて、人間の心の中には色々惡い軍勢が強く、善い方の軍勢が弱いので危い、動もすれば煩惱が勝を制して來る、或は誘惑が勝を制して來ると云ふやうな場合にその援兵となるものは精進である。その精進の援兵に依つて煩惱、誘惑の軍に勝つことが出來るのである。又人が殺生をしないとか盜みをしないとか云ふ五つの戒を持つて行くのも皆精進の力があつてその大なる理想を實現して行くことが出來るのである、煩惱の賊を滅ぼして、そこに眞の幸福と眞の善とを贏ち得るのが即ち佛敎の目的である。それが精進である。斯の如く答へたのであります。

王復那先に問ふ、何等をか意に當に諸の善事を念ずべしとなすや、那先の言く、譬へば人の香華を取るが如し、縷を以て合せて連楔すれば、風も吹き散らすこと能はず、白黑を別知し思惟して以後便ち惡を棄て善に就く、那先の言く、譬へば王の守門者あるが如し、王に所敬者有り所不敬者有るを知り、王を利せざるもの有るを知る、所敬にして王を利する者は便ち之を內れ、王の所不敬者、王を利せざる者は即ち內れず、人の意を持すにも是の如く、諸の善は當に之を內るべし、諸の不善は內れず、經に言く、人當に自ら其の意を堅守すべしと。

この一節は六善事の第四、念善の意義を明したのである。

王が重ねて那先比丘に問ふて言はれるには、前きにお話の中に諸の善事を念ずと云ふ事があつたが、それはどう云ふ意味でありますか。那先比丘答へて申上げるには、念善の意味を譬へて申しますれば香りの良き花を取るやうなものであつて、その花を繫いで花輪のやうにして置いたならば風もその花を吹き散らすことは出來ない、一つ々々にして置けば花は飛ぶけれども、多く繫ぎ合して置けば飛ばない。人が善を念ずる意味は、總ての事柄に對して白い黑い即ち善し惡しを別ち知り、その事柄の意義を能く考へて、而して後に惡い考なり惡い行ひは捨てゝ善き事に就くやうにして行かなければならぬのである。佛敎徒の本領は事每に純白の道德觀念に依つて、その判斷と行爲を誤らぬやうにして行くに在る。尙那先比丘は譬を擧げてこの意義を說明して言ふに、恰度王樣の門に門衛が居るやうなものである。この門衛の心得は、王の所に來る人の中には、王を敬ふ精神を持つて居る者と、敬はない精神を持つて居る者とがある。その王を敬はざる者は或は王に危害を加へるかも知れない、又王の爲に不利益なる事をするかも知れない。其等を能く鑑別けて、王を敬ひ、王の爲には忠節を盡す者であれば內に入れる、王を敬はず王に不利益を與へようとする者なれば決して內に入れない、それが門衛の心得である。人が自分の心の働を持して行くにも恰度その通りで、正しい精神を助けるものは之を容れる、正しき精神を損ふものは之を斥けると云ふ考でなければならぬ。それであるから釋迦牟尼佛がお經に說いて卽せられて居るには「人當に自らその意を堅守すべし」とあ

る、人たるものは自らその意を堅く守ると云ふことてなければならぬ。他力ではいけない、自分が理性の判斷を以て、善不善を吟味して、不善を去つて善に就く、さうして正しき心を堅く守る。それには內を動搖せしめず外は誘惑に破られぬやうに守つて行く、それが念善の意義である。斯う答へた。

王復那先に問ふ、何等をか其の心を一にすと爲す、那先の言く、諸善は獨り一心を有すること最第一なり、其の心を一にすれば諸善皆之に隨ふ、經に言く、諸善は一心を主と爲す、學道の人衆多なるも皆當に一心に歸すべしと。

この一節は六善事の第五一心の意義を明したのであつて、王復た那先にどう云ふ事が心を一にすと云ふ意味であるかと尋ねた。那先比丘答へて申上げるには、人が善を爲すには數多いが、その中に於て心を一にすると云ふのが最も善い事である。諸善根の第一に位するのである。何故なればその心が統一されて居つて散亂しなかつたならば、理想なり信念なりに集中するから、その理想に導かれ信念に導かれて樣々なる善が發達する譯である。されば釋迦如來がお經に說いて仰せられるには、「諸善は一心を主と爲す、學道の人衆多なるも皆當に一心に歸すべし。」心の散亂を防いで一心を主と爲すと云ふ事は是は最も大切な事である。故に佛敎を學ぶ者は澤山あり隨つて修行も亦色々あるけれども、第一に大切なるは心を統一する事であると說かれて居る。

王復那先に問ふ、何等をか智となす、

本多日生猊下著書一覽

○法華經の心髓　金壹圓六拾錢
○日蓮主義初步　金七拾錢
○日蓮主義　金壹圓五拾錢
○修養と日蓮主義　金壹圓五拾錢（品切れ）
○國民道德と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○日蓮聖人正傳　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義綱要　金貳圓貳拾錢（品切れ）
○日蓮聖人の感激　金貳圓貳拾錢（品切れ）
○日蓮主義の運用　金貳圓五拾錢
○東洋文明の權威　金貳圓貳拾錢
○國民敎化　金貳圓貳拾錢
○法幢　金貳圓貳拾錢
○戰士の伴侶　金貳圓貳拾錢
○思想問題の歸結と法華經　金貳圓
○聖訓要義　各卷壹部金貳圓貳拾錢
○開目抄詳解　上卷一部金貳圓八拾錢
○聖語錄　金貳圓八拾錢
○優婆塞戒經通解　金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解　金八拾五錢
以上各送料一部金八錢
○法華經講義　上卷下卷各一部金參圓四拾錢　送料一部金拾八錢

○大藏經要義　一部金參圓八拾錢十一卷完既刊　送料一部金十八錢半年前金送料不要
○法華經要文　並製金參拾錢　上製金五拾錢　送料一部金貳錢
○佛敎信仰の正統　金壹圓參拾錢郵稅六錢
以上購讀希望の方は左記へ申込まるべし
東京市外品川町妙國寺內
大藏經要義刊行會
振替東京三二五九六番

統一定價

一景	金參拾錢
一ケ年	金參圓參拾錢

送料一錢
送料共

廣告料

一頁	金拾圓
半頁	金六圓
四分ノ一頁	金參圓半

前金の事

大藏經要義

大正十一年九月廿七日印刷納本
大正十一年十月一日發行
（第三百三十三號）

不許複製

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
編輯兼發行人　國友日斌
印刷人　鈴木日雄
印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所　三秀舍
統一發行所
振替東京五一〇七一番
名古屋市中區新榮町四丁目十五番地常德寺內
編輯所　統一編輯所

目次

講示……本多日生
法華經の眞價……森川日修
淨土三部經の教意……井村日咸
日蓮主義より見たる無量義經……古田昂生
ゑゝ母と小鳥
記事報道

法華經要文講義（續）……本多日生
那先比丘經通解（續）……本多日生

第廿六年十一月號

第三百三十三號　明治三十年十二月二十四日　第三種郵便物認可